

# FUJITSU Software Interstage Studio V12.0

A horizontal band with a red abstract graphic featuring glowing, overlapping circular and linear patterns.

## インストールガイド

B1WD-3414-01Z0(00)  
2017年7月

# まえがき

---

## 本書の目的

本書は、Interstage Studioのインストール手順およびアンインストール手順を説明しています。  
Interstage Studioの製品概要や動作環境などについては、以下のマニュアルを参照してください。

- Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書  
本製品の動作環境(基本ソフトウェア、必要メモリ量)、インストールに必要なディスク容量や関連ソフトウェアなどについて説明しています。

## 本書の読者

本書は、Interstage Studioのインストール作業やアンインストール作業を行う方を対象としています。  
本書を参照することによって、Interstage Studioのインストール手順およびアンインストール手順に関する情報を得ることができます。

## 本書の構成

本書は以下の構成になっています。

### 第1章 インストール概要

Interstage Studioのインストールの概要について説明しています。

### 第2章 インストール作業

Interstage Studioのインストール作業を操作手順にそって詳細に説明しています。

### 第3章 アンインストール作業

Interstage Studioのアンインストール作業を操作手順にそって詳細に説明しています。

### 付録A インストール環境の削除

インストールまたはアンインストール時の不測の事態により、以降再インストールまたはアンインストールが正常に動作しなくなった場合にだけ必要な“緊急対処用作業”について説明しています。

## 本書の表記について

本書では、次に示す略称を使用しています。

正式名称	略称
Java(TM) Development Kit Java(TM) Platform, Standard Edition Development Kit Java(TM) SE Development Kit	JDK
Java(TM) 2 Platform, Enterprise Edition	J2EE
Java(TM) Platform, Enterprise Edition	Java EE
JavaServer Pages	JSP
Windows(R) 7 Home Premium	Windows 7 Home Premium
Windows(R) 7 Home Premium Windows(R) 7 Professional Windows(R) 7 Enterprise Windows(R) 7 Ultimate	Windows 7
Windows(R) 8.1 Windows(R) 8.1 Pro Windows(R) 8.1 Enterprise	Windows 8.1

正式名称	略称
Windows(R) 10 Home Windows(R) 10 Pro Windows(R) 10 Enterprise	Windows 10
Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter	Windows Server 2012
Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter	Windows Server 2016
Windows(R) Internet Explorer(R)	Internet Explorer

- 次の製品すべてを指す場合は、「Windows」と表記しています。
  - Windows 7
  - Windows 8.1
  - Windows 10
  - Windows Server 2012
  - Windows Server 2016
- Windows 8.1またはWindows Server 2012をお使いの場合、「スタートメニュー」に関する記述は「アプリ画面」に読み替えてください。アプリ画面は、スタート画面左下の下向き矢印をクリックまたは画面下から上にスワイプして表示します。

## 記号

本書では、以下に示す記号を使用しています。

記号	意味
[ ]	画面やダイアログボックスに表示される文字、およびキーボードのキーを示します。 例: [インストールタイプの選択]画面、[OK]をクリック、[Alt]キー

## 登録商標について

- Microsoft、Active Directory、ActiveX、Excel、Internet Explorer、MS-DOS、MSDN、Visual Basic、Visual C++、Visual Studio、Windows、Windows NT、Windows Server、Win32 は、米国およびその他の国における米国Microsoft Corporationの商標または登録商標です。
- Oracle とJava は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。文中の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。
- その他の記載されている商標および登録商標については、一般に各社の商標または登録商標です。

## 輸出管理規制について

本ドキュメントを輸出または第三者へ提供する場合は、お客様が居住する国および米国輸出管理関連法規等の規制をご確認のうえ、必要な手続きをおとりください。

## 出版年月および版数

出版年月および版数	マニュアルコード
2017年7月 初版	B1WD-3414-01Z0(00) / B1WD-3414-01Z2(00)

## 著作権表示

Copyright 2017 FUJITSU LIMITED

# 目次

第1章 インストール概要.....	1
1.1 機能概要.....	1
1.1.1 Java統合開発環境について.....	1
1.1.2 運用テスト環境について.....	1
1.2 インストールタイプ.....	2
1.3 他製品との関係について.....	2
第2章 インストール作業.....	5
2.1 インストール前の作業.....	5
2.2 インストール時の注意事項.....	8
2.2.1 必要なパッケージについて.....	8
2.2.2 暗号化属性のフォルダにインストールするとき.....	8
2.2.3 Windows Defenderが有効になっているとき.....	8
2.2.4 アプリケーションサーバをインストールするとき.....	9
2.2.5 システム環境変数JAVA_HOME、PATHについて.....	10
2.2.6 Interstage Application Serverがインストールされているときの注意事項.....	10
2.2.7 JBKプラグインについて.....	11
2.2.8 アンインストールと管理(ミドルウェア)について.....	12
2.3 インストール作業.....	12
2.3.1 標準インストール.....	13
2.3.2 カスタムインストール.....	23
2.3.3 上書きインストール.....	35
2.4 インストール後の作業.....	40
2.5 インストール時のトラブル対処方法.....	41
第3章 アンインストール作業.....	44
3.1 アンインストール前の作業.....	44
3.2 アンインストール時の注意事項.....	45
3.3 アンインストール作業.....	45
3.4 アンインストール後の作業.....	47
付録A インストール環境の削除.....	51
索引.....	61

# 第1章 インストール概要

Interstage Studioのインストールの概要について説明します。Interstage Studioが動作するオペレーティングシステムやインストールに必要なディスク容量については、『Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書』を参照してください。

## 1.1 機能概要

Interstage Studioをインストールすると、各種アプリケーションの開発からデバッグまでの一連の作業をスタンドアロン環境で簡単に行うための環境がインストールされます。

- **Java統合開発環境**  
各種アプリケーションを開発するための統合開発環境です。  
J2EE/Java EEのサーバサイドのアプリケーション(JSP/Servlet/EJB/Webサービス)や、Appletなどのクライアントアプリケーションの開発が可能です。
- **運用テスト環境**  
開発したアプリケーションをテストするための環境です。  
スタンドアロン環境で、開発したサーバアプリケーションやクライアントアプリケーションのテストを行うことができます。

### ポイント

次のコンポーネントは、富士通ミドルウェア製品が共通に利用するコンポーネントです。コンピュータに導入されていない場合は、本製品と一緒にインストールされます。

- **FJSVcir(CIRuntime Application)**  
インストール/アンインストールの制御、インストールされている製品情報の管理およびアンインストール起動(「アンインストールと管理(ミドルウェア)」)を行います。
- **FJQSS(資料採取ツール)**  
トラブル調査に必要な資料を簡単な操作で採取できるツールです。トラブル発生直後に、FJQSS(資料採取ツール)を使うことで迅速な原因究明につながります。

### 1.1.1 Java統合開発環境について

アプリケーション開発のためのワークベンチがインストールされます。

また、Javaアプリケーションを効率的に開発・運用する際に有用なライブラリとツールを提供する「J Business Kit」など、各種アプリケーションの開発に必要なコンポーネントもインストールされます。

### 1.1.2 運用テスト環境について

Java統合開発環境を使用して開発したアプリケーションをテストするために必要なコンポーネントです。以下に、運用テスト環境を構成するコンポーネントを示します。

- アプリケーションサーバ

なお、使用する機能に応じて別途必要になるソフトウェアがあります。詳細は、以下のアプリケーションサーバのオンラインマニュアルを参照してください。

- **Interstage Application Server システム設計ガイド: 第5章 ソフトウェア条件**  
アプリケーション開発時に必要なソフトウェア  
アプリケーション実行時に必要なクライアント側のソフトウェア

### 注意

下記のオペレーティングシステムをご使用の場合、アプリケーションサーバはインストールできません。

- Windows 7 Home Premium
- Windows 8.1 (Pro/Enterpriseを除く)

- Windows 10 Home

アプリケーションサーバインストール時のセットアップでは、システム規模が"small"(接続クライアント数は1~5)で設定されます。システム規模を変更する場合は、"Interstage Application Server 運用ガイド(基本編)"を参照して変更してください。

## 1.2 インストールタイプ

Interstage Studioのインストールタイプについて説明します。

Interstage Studioでは、利用形態に合わせた次の2種類のセットアップ方法を提供しています。

- **標準インストール**

標準的な機能構成でInterstage Studioをインストールする方法です。簡易にインストールを行いたい場合に選択します。必要な機能だけを選択してインストールする場合は、カスタムインストールでインストールします。

- **カスタムインストール**

Interstage Studioが提供する機能の中から、必要な機能だけを選択してインストールする方法です。Interstage Studioの運用形態に合わせた機能構成で本製品をインストールすることができます。運用テスト環境をご使用にならない場合などは、カスタムインストールでインストールします。

以下に、セットアップ方法ごとにインストールできる機能(コンポーネント)の一覧を示します。

[コンポーネント一覧]

環境	機能	セットアップ方法	
		標準インストール	カスタムインストール
Java統合開発環境	ワークベンチ J Business Kit など	◎	◎
運用テスト環境	アプリケーションサーバ	◎	○
Java Development Kit	JDK 8	◎	◎
	JDK 7	◎	○

凡例

◎:無条件にインストールされます。

○:選択してインストールします。

### 上書きインストール

同じバージョンのInterstage StudioインストールされているInterstage Studioをアンインストールすることなく、現在のインストール内容を変更することができます。

- すでにインストールされている機能のアンインストール  
JDK 8は必須機能であるため、アンインストールできません。
- 新たな機能を選択して追加インストール

Interstage Studioでは、このような機能の追加と削除を行うインストール形態を "**上書きインストール**" と呼びます。

## 1.3 他製品との関係について

### 排他ソフトウェア

Interstage Studioは、以下に示す製品がインストールされている環境にインストールすることはできません。該当製品のアンインストール後に、Interstage Studioをインストールしてください。

- 本製品の異なるバージョン

- Interstage Studio クライアント運用パッケージ
- Interstage Apworks
- Interstage Apworks クライアント運用パッケージ
- Interstage Application Server (32bit) のサーバパッケージ (V9.1まで)
- Interstage Application Server (64bit) のサーバパッケージ
- Interstage Application Server Plus のサーバパッケージ
- Interstage Application Server Plus Developer
- Interstage Apcoordinator
- Interstage Application Framework Suite
- Interstage Business Application Server (32bit) のサーバパッケージ (V9.1まで)
- Interstage Business Application Server (64bit) のサーバパッケージ
- Interstage Business Application Manager for .NET (V2.0.0まで)
- Interstage Interaction Manager のサーバパッケージ (V9.1.0まで)
- Interstage Jクライアント運用パッケージ
- Interstage Web Server (V9.1まで)
- INTERSTAGE WEBCOORDINATOR

## アプリケーションサーバ機能の排他ソフトウェア

アプリケーションサーバ機能をインストールする場合、以下に示す製品がインストールされている環境にインストールすることはできません。該当製品をアンインストールしたあとに、本製品をインストールしてください。

- Interstage Application Server のサーバパッケージ (V9.2以降) (注1)
- Interstage Application Server のクライアントパッケージ
- Interstage Application Server Plus のクライアントパッケージ
- Interstage Business Application Server のサーバパッケージ (V9.2以降) (注1)
- Interstage Business Application Server のクライアントパッケージ
- Interstage Job Workload Server のサーバパッケージ (注1)
- Interstage Web Server (V10.0、V10.1)
- Interstage Web Server Express
- Interstage Application Development Cycle Manager (サーバ)
- Interstage Security Director (IIOPアプリケーションゲートウェイ機能)
- Interstage Service Integrator (サーバ)
- Interstage Shunsaku Data Manager (V7)
- Interstage XML Business Activity Recorder (連携機能、蓄積機能)
- Interstage List Works (サーバ)
- Systemwalker CentricMGR (運用管理クライアント)
- Systemwalker CentricMGR (運用管理サーバ)
- Systemwalker Centric Manager (運用管理クライアント)
- Systemwalker Centric Manager (運用管理サーバ)

- Systemwalker Centric Manager (V13.4.0以降) (注2)
- Systemwalker PKI Manager
- Systemwalker Software Configuration Manager (管理サーバ)
- Systemwalker IT Change Manager (マネージャー)
- Systemwalker Service Catalog Manager
- ServerView Resource Orchestrator Cloud Edition (管理サーバ)
- Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition (注3)
- Systemwalker Runbook Automation

注1) 同一のコンピュータに本製品を導入する場合は、本製品のアプリケーションサーバ機能はインストールできません。そのほかにも注意事項がありますので、“[2.2.6 Interstage Application Serverがインストールされているときの注意事項](#)”を参照してください。

注2) シングル・サインオンサーバを使用している場合は排他ソフトウェアです。

注3) ダッシュボード/BrowserAgentを利用する場合のみ、排他ソフトウェアです。

### ワークベンチのプラグインを提供している製品との関係

本製品のワークベンチを機能拡張するプラグインを提供する製品と組み合わせる場合は、通常本製品を先にインストールする必要があります。あらかじめプラグイン提供製品のドキュメントを参照し、インストール手順、アンインストール手順や注意事項を確認のうえ、作業を実施してください。

## 第2章 インストール作業

Interstage Studioのインストール作業について説明します。なお、Interstage Studioのインストール作業は、コンピュータの管理者またはAdministratorsグループのメンバで実施してください。

### ポイント

#### インストール先のファイルシステムについて

次の機能はNTFS上にインストールする必要があります。この機能をインストールする際は、本製品のインストール先にはNTFS上のフォルダを指定します。

- アプリケーションサーバ

## 2.1 インストール前の作業

本製品をインストールする前に、必ず以下の作業を行ってください。

- インストールの可否の確認
- アプリケーションの停止
- 環境の確認
- 必要なソフトウェアのインストール
- ソフトウェアのアンインストール
- その他

### インストールの可否の確認

- 『Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書』の"基本ソフトウェア"を参照し、インストール可能なオペレーティングシステムであるか確認してください。
- アプリケーションサーバをインストールする場合、コンピュータのホスト名に設定できる文字には制約があります。["ホスト名に設定できる文字について"](#)を参照し、ホスト名に使用している文字に問題がないか確認してください。問題がある場合は、ホスト名を変更してください。

### アプリケーションの停止

- アプリケーションを停止する

すべてのアプリケーションを終了させてください。

Interstage Studioをインストールする際に、Interstage Studioが利用するディスク、レジストリなどの資源を使用しているとインストール作業に失敗する場合があります(例: イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタなど)。

他製品のインストーラや「アンインストールと管理(ミドルウェア)」が動作している場合は、終了させてください。

- スクリーンセーバーについて

スクリーンセーバーが起動されるように設定されていると、インストーラの動作が不安定になる場合があります。スクリーンセーバーの設定を"(なし)"にしてインストールしてください。

### 環境の確認

- ディスク容量について

本製品のインストール時に必要なディスク容量については、『Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書』を参照してください。

• PATH、CLASSPATH、JAVA\_HOMEについて

Interstage Studioのインストールでは、環境変数PATHにJava統合開発環境および運用テスト環境を構成するコンポーネント固有のフォルダを設定します。また、環境変数CLASSPATHには、JavaクラスライブラリのパスおよびJARファイルが設定されます。設定後のシステム環境変数PATH、CLASSPATHの長さが有効長を超える場合は、パスは設定されません。PATHおよびCLASSPATHに、必要のないパスが設定されていないか確認してください。必要のないパスが設定されている場合は、不要なパスを削除してください。

C:\Interstageにインストールした場合は、次のように設定されます。

コンポーネント	PATHに設定するパス
Java統合開発環境	C:\Interstage\IDE\JDK8\bin
アプリケーションサーバ	C:\Interstage\APS\bin C:\Interstage\APS\ODWIN\bin

コンポーネント	CLASSPATHに設定するパス
Java統合開発環境	C:\Interstage\IDE\JBK\gui\jbkgui.jar (注1)
アプリケーションサーバ	C:\Interstage\APS\ODWIN\etc\class\ODjava4.jar C:\Interstage\APS\eswin\lib\esnotifyjava4.jar C:\Interstage\APS\lib\isadmin_scs.jar C:\Interstage\APS\J2EE\lib\isj2ee.jar C:\Interstage\APS\J2EE\lib\providerutil.jar C:\Interstage\APS\J2EE\lib\fscontext.jar C:\Interstage\APS\jms\lib\jfjmsprovider.jar C:\Interstage\APS\lib

注1) "."はカレントフォルダを示す記号です。

コンポーネント	JAVA_HOMEに設定するパス
Java統合開発環境	C:\Interstage\IDE\JDK8

なお、カスタムインストールの[Java環境情報のシステムへの登録]画面で[登録しない]を選択した場合は、環境変数の設定は行いません。詳細は、「本製品のJava環境情報をシステムに登録するか選択する」を参照してください。

- 本製品をインストールするシステムにおいて、アプリケーションを含むすべてのサービスでポート番号が重複する可能性がないかを以下の手順で確認してください。システム上のすべてのサービスにおいて、それぞれ異なるポート番号を設定する必要があります。
  1. システム上のサービスが使用しているポート番号を確認します。ポート番号の確認方法については、それぞれのサービスのマニュアルを参照してください。
  2. 本製品のアプリケーションサーバのサービスが使用するポート番号を確認します。アプリケーションサーバのサービスが使用するポート番号については、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。
  3. 1.と2.のポート番号が重複していないかを確認します。  
ポート番号が重複している場合は、以下のいずれかの方法で対処してください。
    - 本製品のインストール前に、ポート番号が重複する可能性のあるシステム上のサービスを停止させます。
    - 本製品のインストール時の「ポート番号の設定」画面で、本製品のサービスが使用するポート番号を未使用のポート番号に変更します。  
注) 本画面では、すべてのサービスのポート番号を変更することはできません。
    - 本製品のインストール後に、それぞれのポート番号の設定箇所、ポート番号を未使用のポート番号に変更します。本製品のサービスが使用するポート番号の設定箇所については、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。

## 注意

本製品をインストールするシステムにおいて、WebサーバとしてMicrosoft(R) Internet Information Servicesを使用している場合は、Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)の初期値のポート番号がMicrosoft(R) Internet Information Servicesの初期値のポート番号と同じ値(80)で設定されるため、注意してください。

本製品のインストール時の"ポート番号の設定"画面でポート番号を変更しないでインストールを続行させた場合は、インストール後の「Interstage HTTP Server 2.2」サービスの起動処理でエラーが発生します。

インストール前にMicrosoft(R) Internet Information Servicesを停止させるか、Webサーバを共存させる場合は、ポート番号を未使用のポート番号(80以外)に変更して運用してください。

- 本製品のアプリケーションサーバは8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパスを使用するため、8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパス生成が有効である環境にインストールする必要があります。"Windows(R)の8.3形式(ショートネーム)のパス生成が無効であるとき"を参照して、8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパス生成が有効であるかを確認してください。
- 本製品の導入時には、自ホストのホスト名に対するアドレスとして、ループバックアドレス以外のそのマシンに割り当てられた実IPアドレスを、必ずhostsファイルに設定してください。また、同じホスト名をループバックアドレス("127.0.0.1"、 "::1")に設定しないようにしてください。

## 必要なソフトウェアのインストール

以下のソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールしてください。

- Internet Explorer
- インターネットプロトコル(TCP/IP)

## 注意

### IPv6環境について

本製品は、IPv6/IPv4デュアルスタックだけをサポートしています。IPv6環境で本製品を使用する場合は、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)をインストールしてかつ、有効にしてください。

IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)がインストールされていない環境で本製品をインストールした場合、各種ポート番号の設定時に有効なポート番号を設定しても使用中である旨のメッセージが表示されます。IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)をインストールしてから、本製品をインストールしてください。

## ソフトウェアのアンインストール

"1.3 他製品との関係について"で示す排他ソフトウェアをインストールしている場合は、これらのソフトウェアをアンインストールしてください。

## その他

以下に示す項目について確認し、必要であれば対応してください。

- オペレーティングシステムの更新プログラムについて

オペレーティングシステムの信頼性を保証するためにも最新の更新プログラムを適用してください。

Windows 8.1またはWindows Server 2012 R2をお使いの場合は、更新プログラム2919355が適用済みであることを確認してください。

- フォルダおよびファイルのアクセス権について

Interstage StudioをNTFS形式のドライブにインストールする場合、インストールフォルダ配下のフォルダおよびファイルのアクセス権は、Interstage Studioをインストールするフォルダのアクセス権を引き継ぎます。

Interstage Studioをインストールするフォルダのアクセス権には、以下の権限を付与してください。

なお、インストール後、"インストール資源のセキュリティ強化"を参照し、必要に応じて、セキュリティを強化してください。

- Administratorsグループ(フルコントロール)
- SYSTEMグループ(フルコントロール)

- レジストリのアクセス権について

HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu (\*1) がすでに存在する場合は、以下の権限が付与されていることを確認してください。

- Administratorsグループ(フルコントロール)
- SYSTEMグループ(フルコントロール)

HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu が存在しない場合は、HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE に上記の権限が付与されていることを確認してください。

\*1: 64ビット版OSの場合は、HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Fujitsu です。

- リモートデスクトップサービスのインストールモードへの変更について

リモートデスクトップサービスが実行モードの状態の場合は、インストールモードに変更する必要があります。本製品をインストールする前に、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスをインストールモードに変更してください。

```
CHANGE USER /INSTALL
```

また、Interstage Studioのインストール完了後は、必ず実行モードに変更してください。実行モードへの変更については"[リモートデスクトップサービスの実行モードへの変更について](#)"を参照してください。

## 2.2 インストール時の注意事項

本製品をインストールする際の注意事項について説明します。

### 2.2.1 必要なパッケージについて

本製品を使用する場合、以下のパッケージが必要となります。  
各パッケージがコンピュータにインストールされていない場合は、本製品のインストーラが自動的にインストールします。

- Microsoft Visual C++ 2010 SP1 再頒布可能パッケージ (x86)
- Microsoft Visual C++ 2013 再頒布可能パッケージ (x86)
- Microsoft Visual C++ 2015 再頒布可能パッケージ Update 3 (x86)

本製品をご利用の間は、これらのパッケージをアンインストールしないでください。

### 2.2.2 暗号化属性のフォルダにインストールするとき

暗号化属性が設定されたフォルダに本製品をインストールすると、サービスの起動やアプリケーションの実行でエラーが発生する場合があります。

暗号化属性が設定されていないフォルダにインストールするか、暗号化属性を解除してください。

### 2.2.3 Windows Defenderが有効になっているとき

Windows Defenderが有効になっている場合、Windows Defenderの履歴およびイベントビューアのシステムログに、以下のWindows Defenderからのメッセージが出力されることがあります。

これは、Windows Defenderのリアルタイム保護エージェントがサービスのソフトウェアの登録を監視しているためで、そのまま使用して問題ありません。

また、インストール中、Windows Defenderのアイコンがタスクバーの通知領域に表示されることがあります。この場合、Windows Defenderを開き、「コンピュータの設定に対する変更を確認する」の画面で、[操作を適用する]をクリックしてください。

#### Windows Defenderの履歴のメッセージ

日本語

```
このプログラムは、望ましくない動作をする可能性があります。
```

英語

This program has potentially unwanted behavior.

## イベントビューアのシステムログ

日本語

Windows Defender リアルタイム保護エージェントで、変更が検出されました。これらの変更を行ったソフトウェアに潜在的リスクがないか分析することをお勧めします。これらのプログラムの動作方法に関する情報を使用して、これらのプログラムの実行を許可するか、コンピュータから削除するかを選択できます。プログラムまたはソフトウェア発行者を信頼できる場合のみ、変更を許可してください。Windows Defender は許可された変更を元に戻せません。

英語

Windows Defender Real-Time Protection agent has detected changes. Microsoft recommends you analyze the software that made these changes for potential risks. You can use information about how these programs operate to choose whether to allow them to run or remove them from your computer. Allow changes only if you trust the program or the software publisher. Windows Defender can't undo changes that you allow.

## 2.2.4 アプリケーションサーバをインストールするとき

運用テスト環境を構成するコンポーネントの1つである"アプリケーションサーバ"のインストールに関する注意事項です。

### インストール先のファイルシステムについて

アプリケーションサーバはNTFS上にインストールする必要があります。アプリケーションサーバをインストールする場合は、本製品のインストール先にはNTFS上のフォルダを指定してください。

### Windows(R)の8.3形式(ショートネーム)のパス生成が無効であるとき

アプリケーションサーバは、8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパス生成が有効である環境にインストールする必要があります。8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパス生成が無効である環境にアプリケーションサーバをインストールした場合、サービスを起動できない可能性があります。

以下の手順で8.3形式(ショートネーム)のファイル名のパス生成が有効であるかを確認し、無効である場合は、有効となるように変更してからアプリケーションサーバをインストールください。なお、Windowsの8.3形式(ショートネーム)のパス生成の詳細については、OSが提供しているマニュアルを参照してください。

### 注意

ここでは、Windows Server 2012 R2の場合のコマンド実行について説明します。Windows Server 2012 R2以外の場合は、出力結果が異なる可能性があるため、OSに応じた手順で実施してください。

1. 以下のコマンドを実行し、出力される値を確認します。

### 例

```
c:\>fsutil 8dot3name query C:
ボリュームの状態は 1 です (8dot3 名の作成は無効です)。
レジストリの状態は 2 です (ボリューム単位で設定します - 既定値)。
```

上の 2 つの設定に基づいて、8dot3 名の作成は C: で無効です

2. 手順1で、インストール先のボリュームが2つの設定に基づいて無効と表示されている場合、以下のどちらかの方法で有効に変更します。
  - システム上のすべてのボリュームを有効にする場合



例

```
c:\>fsutil 8dot3name set 0
現在のレジストリの状態は 0 です (すべてのボリューム上で 8dot3 名の作成を有効にします)。
```

- 一 ボリューム単位で有効にする場合



例

インストール先のDドライブを有効にする場合

```
c:\>fsutil 8dot3name set 2
現在のレジストリの状態は 2 です (ボリューム単位で設定します - 既定値)。
c:\>fsutil 8dot3name set C: 0
8dot3name の生成が C: で有効になりました
```

3. コンピュータを再起動します。
4. 本製品のアプリケーションサーバをインストールします。

## ホスト名に設定できる文字について

ホスト名には、図1に示す文字を使用してください。

- アルファベット大文字(“A”~“Z”)
- アルファベット小文字(“a”~“z”)
- 数字(“0”~“9”) (注1)
- ハイフン(“-”) (注2)
- ピリオド(“.”) (注2)

(注1) 最後のピリオドの直後には、数字は使用できません。

(注2) ハイフンおよびピリオドは、ホスト名の先頭文字として使用できません。また、ピリオドは、ホスト名の最後に指定できません。

図1 ホスト名に設定可能な文字

ホスト名に図1以外の文字(例:“\_”(アンダースコア))を使用した場合、インストール完了後にInterstage管理コンソールにログインすると、「IS: エラー: is40003: Interstage JMX サービスに接続できませんでした」のメッセージが出力され、Interstageの運用操作は行えません。

## 「Windowsセキュリティの重要な警告」について

Java EE 7機能のセットアップ中に「Windowsセキュリティの重要な警告」が表示されることがあります。動作上の影響はないので、対処は不要です。

## 2.2.5 システム環境変数JAVA\_HOME、PATHについて

JDK 7をインストールする場合であっても、本製品のインストール時には、JDK 8の格納先がシステム環境変数JAVA\_HOMEおよびPATHに設定されます。

## 2.2.6 Interstage Application Serverがインストールされているときの注意事項

アプリケーションサーバ機能を含む下記の製品と、Interstage Studioを同一コンピュータ上で運用する際の注意事項について説明します。

表 組合せ可能なアプリケーションサーバ機能搭載製品

項番	製品名	バージョン・レベル
1	Interstage Application Server Standard-J Edition (サーバパッケージ)	V9.2以降
2	Interstage Application Server Enterprise Edition (サーバパッケージ)	V9.2以降
3	Interstage Business Application Server Standard Edition (サーバパッケージ)	V9.2以降
4	Interstage Job Workload Server (サーバパッケージ)	V9.3以降

上記製品のドキュメントに、Interstage Studioとの組合せに関して注意事項が記載されていれば、それに従ってください。

## インストール手順

必ず、以下の順番でインストールを実施してください。

### 1. Interstage Application Serverのインストール

表に示す製品は、本製品をインストールする前にインストールしてください。インストール方法については、各製品のソフトウェア説明書を参照してください。

### 2. Interstage Application Serverのサービスの停止

本製品をインストールする前に、Interstage Application Serverのサービスを停止してください。サービスの停止方法は、Interstage Application Serverのマニュアルを参照してください。

### 3. Interstage Studioのインストール

"2.3.2 カスタムインストール"の手順に従って、本製品のインストールを実施します。なお、インストールタイプの選択を行う[インストールタイプの選択]画面は表示されません。

[インストール機能の選択]画面では、アプリケーションサーバは選択できません。

[インストール機能の選択]画面のあとに[Java環境情報のシステムへの登録]画面が表示されます。この画面では、[登録しない]を選択してください。

## 注意

[登録する]を選択した場合、次の処理が行われます。すでに別の製品によりJDKやJREがインストールされている場合は、注意が必要です。

- 本製品がインストールするJDKおよびJBKプラグインの情報をシステムに登録します。
- システム環境変数 PATH、CLASSPATH、JAVA\_HOMEの設定を行います。環境変数PATHおよびCLASSPATHに追加するパスについては、"[環境の確認](#)"を参照し、変数の長さが有効長を超えることがないようにしてください。

## 注意事項

- 本製品導入中は、Interstage Application Server製品のインストールに関連する操作はしないでください。インストーラまたはアンインストーラを起動した場合は、操作を進めずに直ちに終了してください。Interstage Application Server製品の機能の追加、削除などオプションの変更が必要な場合は、一度本製品をアンインストールしてから実施してください。
- Interstage Application Server製品をアンインストールする場合は、必ず先に本製品をアンインストールしてから、Interstage Application Server製品のアンインストールを実施してください。本製品を引き続き使用する場合は、その後に再度本製品のインストールを実施してください。

## 2.2.7 JBKプラグインについて

以下の製品または機能がインストールされている環境に、本製品をインストールした場合は、本製品のJBKプラグインが有効となり、すでにインストール済みのJBKプラグインは動作しません。

- Interstage Application Server クライアントパッケージ
- Interstage Studio Standard-J Edition のダウンロードインストーラでインストールしたJBKプラグイン

なお、本製品をアンインストールした場合は、上記のJBKプラグインが動作します。

## 2.2.8 アンインストールと管理(ミドルウェア)について

本製品をインストールすると、「アンインストールと管理(ミドルウェア)」もインストールされます。「アンインストールと管理(ミドルウェア)」は、富士通ミドルウェア製品共通のツールです。インストールされている富士通ミドルウェア製品情報の管理や製品のアンインストールの起動を行います。

### 注意

- Interstage Studioをアンインストールする場合、「アンインストールと管理(ミドルウェア)」からアンインストールを行ってください。
- 本ツールは、Interstage Studio以外に他の富士通ミドルウェア製品情報も含めて管理しています。どうしても必要な場合を除いて、本ツールをアンインストールしないでください。  
誤ってアンインストールしてしまった場合は、下記手順に従い再度インストールしてください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー一名でログオンするか、管理権限を持つアカウントに切り替えます。
2. ドライブ装置に製品メディアをセットします。
3. インストールコマンドを実行します。

```
<製品メディア>%INST%cir%cirinst.exe
```

- Interstage Studioがサポートしていない環境に対して本ツールだけインストールされる場合があります。その際は下記の手順でアンインストールを行ってください。
- 本ツールをアンインストールする場合は、以下の手順で行ってください。

1. 「アンインストールと管理(ミドルウェア)」を起動して他の富士通ミドルウェア製品が残っていないか確認します。起動方法は以下のとおりです。

スタートメニューの [すべてのプログラム] > [Fujitsu] > [アンインストールと管理(ミドルウェア)] を実行します。

2. インストールされている富士通ミドルウェア製品が何もない場合、下記のアンインストールコマンドを実行します。

```
%SystemDrive%\Fujitsu\F4CR%bin%cirremove.exe
```

3. "本ソフトウェアは富士通製品共通のツールです。本当に削除しますか？ [y/n]: "と表示されたら、「y」を入力して続けます。  
数秒ほどでアンインストールが完了します。  
登録されている製品が残っている場合は、何も表示せず終了します。

## 2.3 インストール作業

Interstage Studioのインストールでは、以下に示すセットアップ方法を提供しています。

セットアップ方法	概要
標準インストール	標準的な機能構成でInterstage Studioをインストールする方法です。 ワンタッチで簡単にInterstage Studioをインストールできます。
カスタムインストール	必要な機能(コンポーネント)を選択してInterstage Studioをインストールする方法です。 Interstage Studioの利用形態に合わせた機能構成でInterstage Studioをインストールできます。
上書きインストール	同一バージョンのInterstage Studioがインストールされている環境で有効なセットアップ方法です。 以下の操作を行うことができます。 ・インストール済みのコンポーネントのアンインストール ・新たなコンポーネントの追加インストール インストール先のフォルダを変更することはできません。

ここでは、各セットアップ方法に従ったInterstage Studioのインストール手順について説明します。

## 関連製品がインストール済みの環境では

関連製品がインストール済みであり、本製品の標準的な機能構成でインストールを行うことができない場合、自動的に「カスタムインストール」が選択されます。カスタムインストールの手順は "[2.3.2 カスタムインストール](#)" を参照してください。

### 2.3.1 標準インストール

---

Interstage Studioのセットアップ方法で「標準インストール」を選択した場合の作業手順について説明します。

1. すべてのアプリケーションを終了させる
2. 製品DVDをセットする
3. [標準インストール]を選択する
4. インストール先のフォルダを選択する
5. ポート番号を設定する
6. Java EE 7機能の認証情報を設定する
7. Java EE 7機能が使用するポート番号を設定する
8. Java EE 6機能の認証情報を設定する
9. Java EE 6機能が使用するポート番号を設定する
10. インストールの内容を確認する
11. インストールの開始
12. インストールの完了

#### 1. すべてのアプリケーションを終了させる

すべてのアプリケーションが終了していることを確認してください。

#### 2. 製品DVDをセットする

製品DVDを、ご利用になるコンピュータのDVD装置にセットします。インストーラが自動的に起動され、以下に示す画面が表示されます。



[インストール]をクリックしてインストールを開始します。

ご使用のオペレーティングシステムの機能により、ユーザアカウント制御のダイアログボックスが表示される場合があります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行]をクリックしインストールを継続してください。

## ポイント

DVDドライブの自動実行が有効になっていない場合は、以下のコマンドを実行してください。

DVDドライブ名: %autorun.exe

## 参考

ボタンの説明

ボタン	概要
はじめにお読みください	Interstage Studioのソフトウェア説明書を表示します。
インストールガイド	本書を表示します。
インストール	Interstage Studioのインストールを開始します。
マニュアル	オンラインマニュアルを表示します。
終了	Interstage Studioのインストールを終了します。

### 3. [標準インストール]を選択する

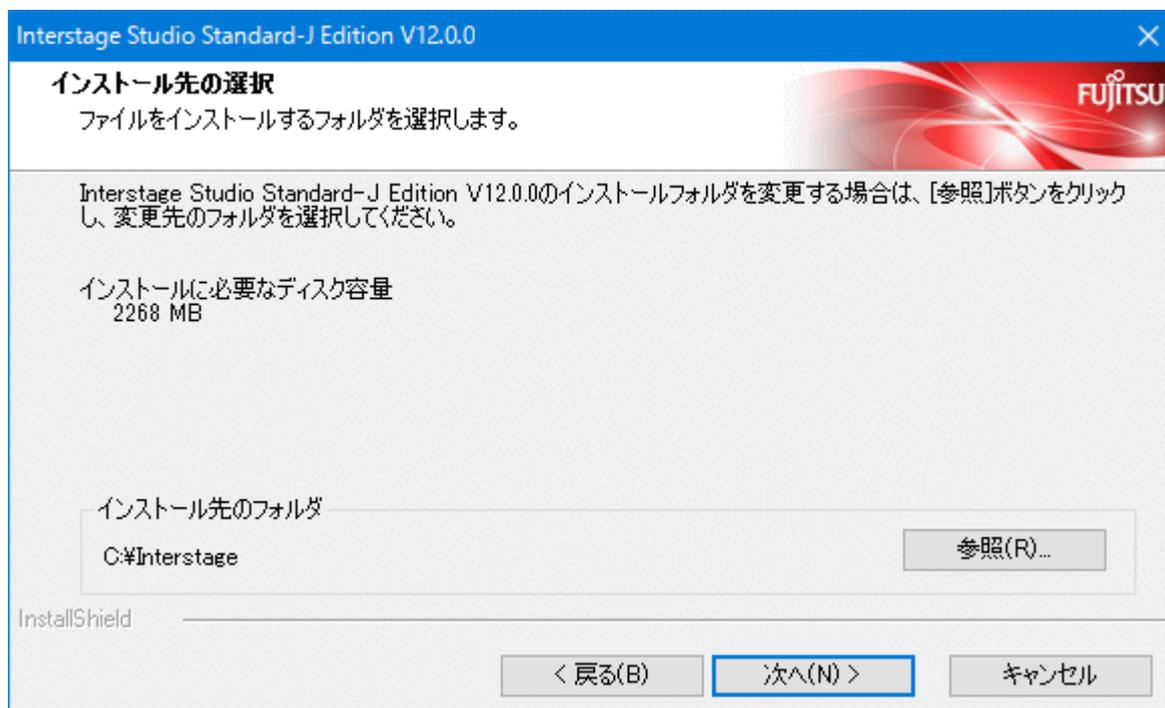
[インストールタイプの選択]画面で、セットアップ方法として[標準インストール]を選択します。インストールされるコンポーネントについては、「[コンポーネント一覧](#)」を参照してください。



[次へ]をクリックします。[キャンセル]をクリックすると、インストールを中止することができます。

### 4. インストール先のフォルダを選択する

Interstage Studioのインストール先フォルダを選択する[インストール先の選択]画面が表示されます。



[インストール先のフォルダ]には、Interstage Studioのインストール先フォルダが表示されています。

- 表示されているフォルダにインストールする場合は  
[次へ]をクリックします。
- インストール先のフォルダを変更する場合は  
[参照]をクリックして、[フォルダの選択]画面を表示します。  
[フォルダの選択]画面でインストール先のフォルダを選択して、[OK]をクリックします。  
[インストール先の選択]画面の[インストール先のフォルダ]に変更した内容が表示されていることを確認し、[次へ]をクリックします。

## 注意

### インストールフォルダに関する注意事項

- 本製品のインストール先として別の製品のインストール先と同一のフォルダを指定する場合は、各製品のドキュメントを参照してサブフォルダやファイルが重ならないことをあらかじめ確認してください。本製品のフォルダ構成は、『Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書』の"フォルダ構成とファイル"で確認してください。
- インストールフォルダ名に":", ";", "/", "\*", "?", "<", ">", "(", ")", "|", "#", "%", "^", "!", "'", "." および全角の文字は指定できません。
- インストール先フォルダ名として指定できる長さは、58文字以内です。
- アプリケーションサーバをインストールする場合、インストールフォルダ名に指定できる文字は以下のとおりです。
  - 半角英数字
  - 半角スペース
  - "\_"
  - "-"

上記以外の文字が含まれている場合、サービスの登録や起動に失敗し、インストール処理がハングアップする場合があります。このような状態になった場合は、"[インストール処理がハングアップした場合の対処](#)"を参照して対処してください。

- 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要であれば削除してください。

## 5. ポート番号を設定する

[ポート番号の設定]画面では、Interstage Studioが使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**ポート番号の設定**  
製品が使用するポート番号を変更する場合、設定してください。

ポート番号を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

Interstage管理コンソール	<input type="text" value="12000"/>
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	<input type="text" value="8180"/>
Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)	<input type="text" value="80"/>
CORBAサービス	<input type="text" value="8002"/>

InstallShield

< 戻る(B)    **次へ(N) >**    キャンセル

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されます。

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	8180
Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)	80
CORBAサービス	8002

## 注意

### ポート番号に関する注意事項

- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。
  - 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 6. Java EE 7機能の認証情報を設定する

[Java EE 7機能の認証情報の設定]画面では、管理ユーザーIDと管理者パスワードを指定します。[管理者パスワードの確認入力]には、[管理者パスワード]と同じ文字列を入力してください。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**Java EE 7機能の認証情報の設定**  
Java EE 7機能の認証情報を設定してください。

認証情報を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

管理ユーザーID

管理者パスワード(8文字以上20文字以下)

管理者パスワードの確認入力

InstallShield

< 戻る(B)   **次へ(N) >**   キャンセル

## 注意

### 入力時の注意事項

#### [管理ユーザーID]

- 1文字以上、255文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "." (半角ピリオド)

#### [管理者パスワード]

- 8文字以上、20文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "'" (半角アポストロフィー)
  - "." (半角ピリオド)
  - "@" (半角アットマーク)
  - "+" (半角プラス記号)

[次へ]をクリックします。

## 7. Java EE 7機能が使用するポート番号を設定する

[Java EE 7機能のポート番号の設定]画面では、Java EE 7機能が使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**Java EE 7機能のポート番号の設定**

Java EE 7機能が使用するポート番号を変更する場合、設定してください。

ポート番号を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

HTTPリスナーポート	28484
HTTPSリスナーポート	28585
運用管理用HTTPリスナーポート	12021
IIOPポート	23620
IIOP_SSLポート	23621
IIOP_MUTUALAUTHポート	23622
JMX_ADMINポート	18716

InstallShield

< 戻る(B)    **次へ(N) >**    キャンセル

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。

機能	ポート番号の初期値
HTTPリスナーポート	28484
HTTPSリスナーポート	28585
運用管理用HTTPリスナーポート	12021
IIOPポート	23620
IIOP_SSLポート	23621
IIOP_MUTUALAUTHポート	23622
JMX_ADMINポート	18716

## 注意

### ポート番号に関する注意事項

- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。
  - 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 8. Java EE 6機能の認証情報を設定する

[Java EE 6機能の認証情報の設定]画面では、管理ユーザーIDと管理者パスワードを指定します。[管理者パスワードの確認入力]には、[管理者パスワード]と同じ文字列を入力してください。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**Java EE 6機能の認証情報の設定**  
Java EE 6機能の認証情報を設定してください。

認証情報を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

管理ユーザーID

管理者パスワード(8文字以上20文字以下)

管理者パスワードの確認入力

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル

### 注意

#### 入力時の注意事項

[管理ユーザーID]

- 1文字以上、255文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "." (半角ピリオド)

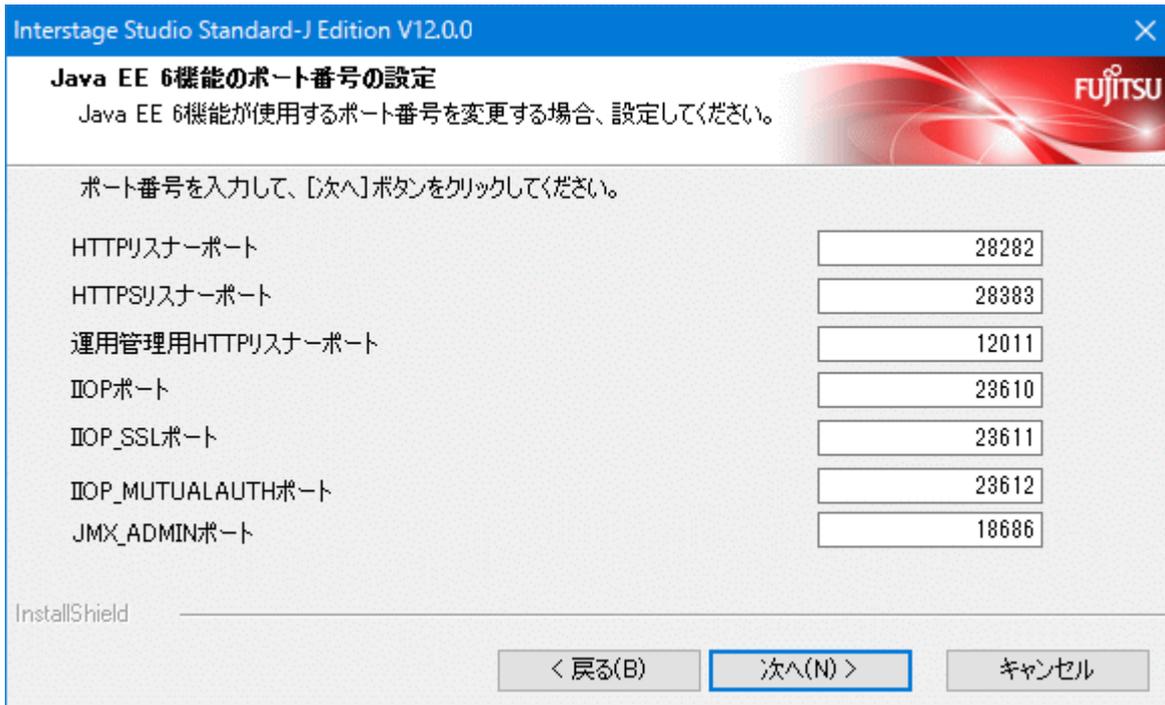
[管理者パスワード]

- 8文字以上、20文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "'" (半角アポストロフィー)
  - "." (半角ピリオド)
  - "@" (半角アットマーク)
  - "+" (半角プラス記号)

[次へ]をクリックします。

## 9. Java EE 6機能が使用するポート番号を設定する

[Java EE 6機能のポート番号の設定]画面では、Java EE 6機能が使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。



それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。

機能	ポート番号の初期値
HTTPリスナーポート	28282
HTTPSリスナーポート	28383
運用管理用HTTPリスナーポート	12011
IIOPポート	23610
IIOP_SSLポート	23611
IIOP_MUTUALAUTHポート	23612
JMX_ADMINポート	18686

## 注意

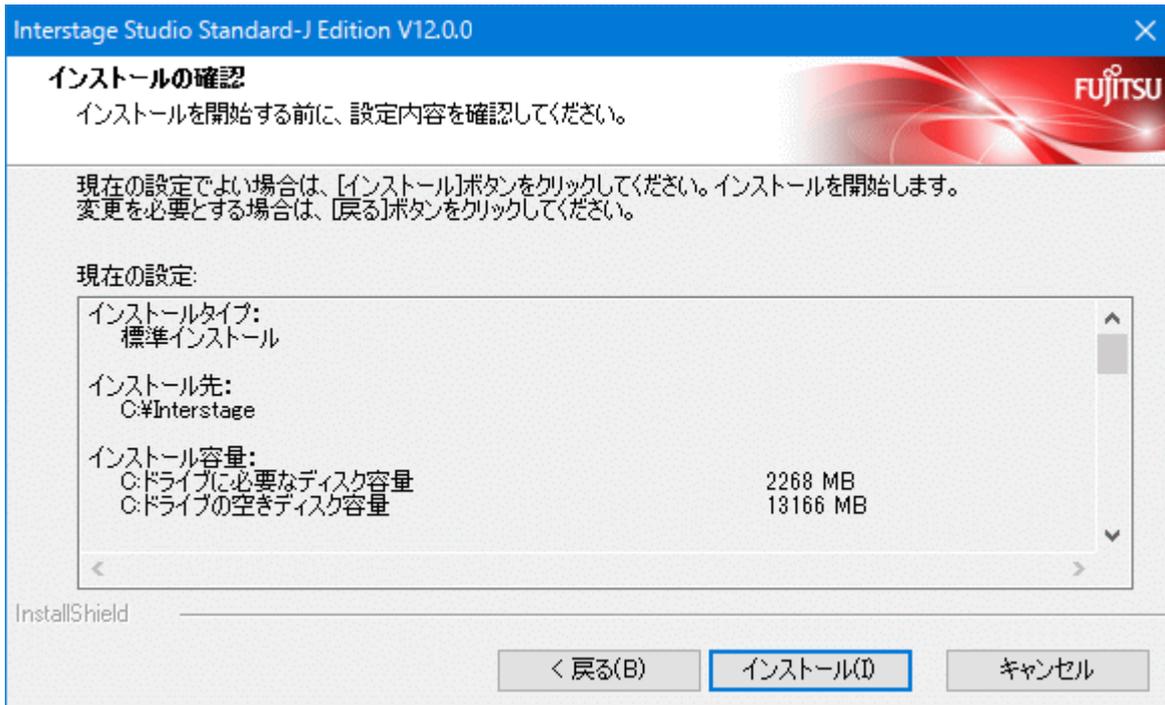
### ポート番号に関する注意事項

- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。  
— 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 10. インストールの内容を確認する

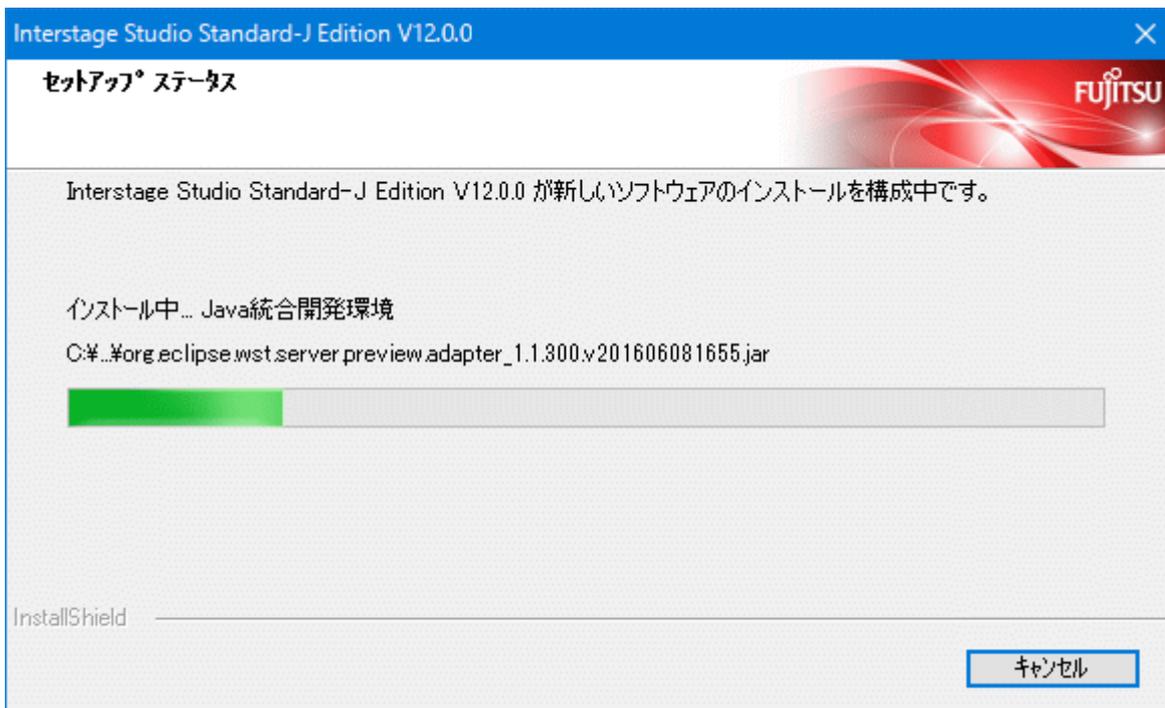
[インストールの確認]画面で、インストールの内容を確認します。



- 表示された内容で問題がない場合は  
[インストール]をクリックしてインストールを開始します。
- インストール内容を変更する場合は  
[戻る]をクリックして、設定した内容を変更します。

## 11. インストールの開始

アプリケーションの開発に必要なコンポーネントおよび運用テスト環境のインストールが開始されます。インストールの進行状況は、[セットアップステータス]画面に表示されます。



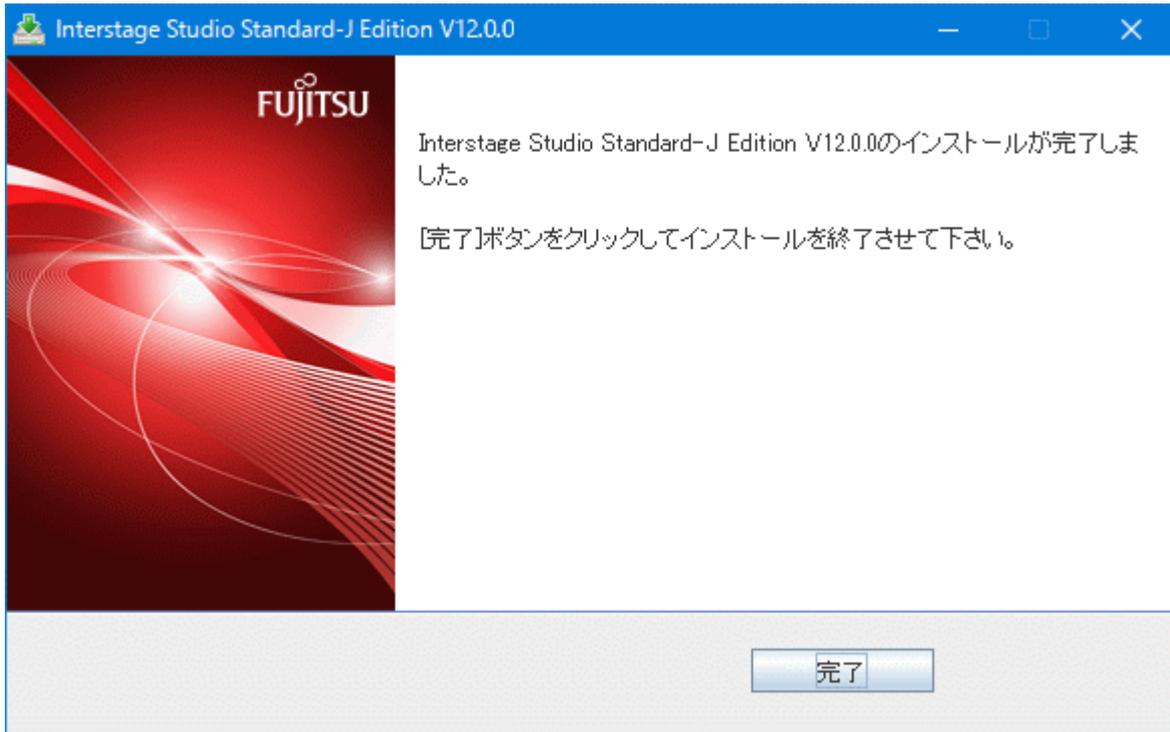
## 注意

### キャンセルについて

[セットアップステータス]画面が表示されている間は、[キャンセル]をクリックしたり、[Alt]キーと[C]キーを同時に押しすぎないでください。キャンセル操作を行いインストール処理がハングアップしてしまった場合は、「インストール処理がハングアップした場合の対処」を参照して対処してください。

## 12. インストールの完了

Interstage Studioのインストールが完了すると、以下に示す画面が表示されます。



[完了]をクリックします。以上で、Interstage Studioのインストール作業は終了です。

[完了]をクリックしたあとは、タスクバーに表示されているインストーラのアイコンが消えるのを確認してから、コンピュータの操作を行ってください。

## 参考

### コンピュータの再起動を促す画面が表示された場合

インストール時にファイルコピーなどで異常が発生した場合、コンピュータの再起動を促す画面が表示されます。その場合、[完了]をクリックして画面を閉じたあとに、コンピュータを再起動してください。

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合のインストール処理は、コンピュータの再起動をもって完了します。

なお、Windows 8.1またはWindows 10をお使いで、高速スタートアップが有効な場合は、必ずスタートメニューまたは[電源]メニューから[再起動]を選択してシステムのリブート(再起動)を実行してください。

## 2.3.2 カスタムインストール

Interstage Studioのセットアップ方法で「カスタムインストール」を選択した場合の作業手順について説明します。

1. すべてのアプリケーションを終了させる
2. 製品DVDをセットする
3. [カスタムインストール]を選択する

4. インストール先のフォルダを選択する
5. インストールする機能を選択する
6. ポート番号を設定する
7. Java EE 7機能の認証情報を設定する
8. Java EE 7機能が使用するポート番号を設定する
9. Java EE 6機能の認証情報を設定する
10. Java EE 6機能が使用するポート番号を設定する
11. 本製品のJava環境情報をシステムに登録するか選択する
12. インストールの内容を確認する
13. インストールの開始
14. インストールの完了

## 1. すべてのアプリケーションを終了させる

すべてのアプリケーションが終了していることを確認してください。

## 2. 製品DVDをセットする

製品DVDを、ご利用になるコンピュータのDVD装置にセットします。  
インストーラが自動的に起動され、以下に示す画面が表示されます。



[インストール]をクリックしてインストールを開始します。

ご使用のオペレーティングシステムの機能により、ユーザアカウント制御のダイアログボックスが表示される場合があります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行]をクリックしインストールを継続してください。

## ポイント

DVDドライブの自動実行が有効になっていない場合は、以下のコマンドを実行してください。

DVDドライブ名: %autorun.exe

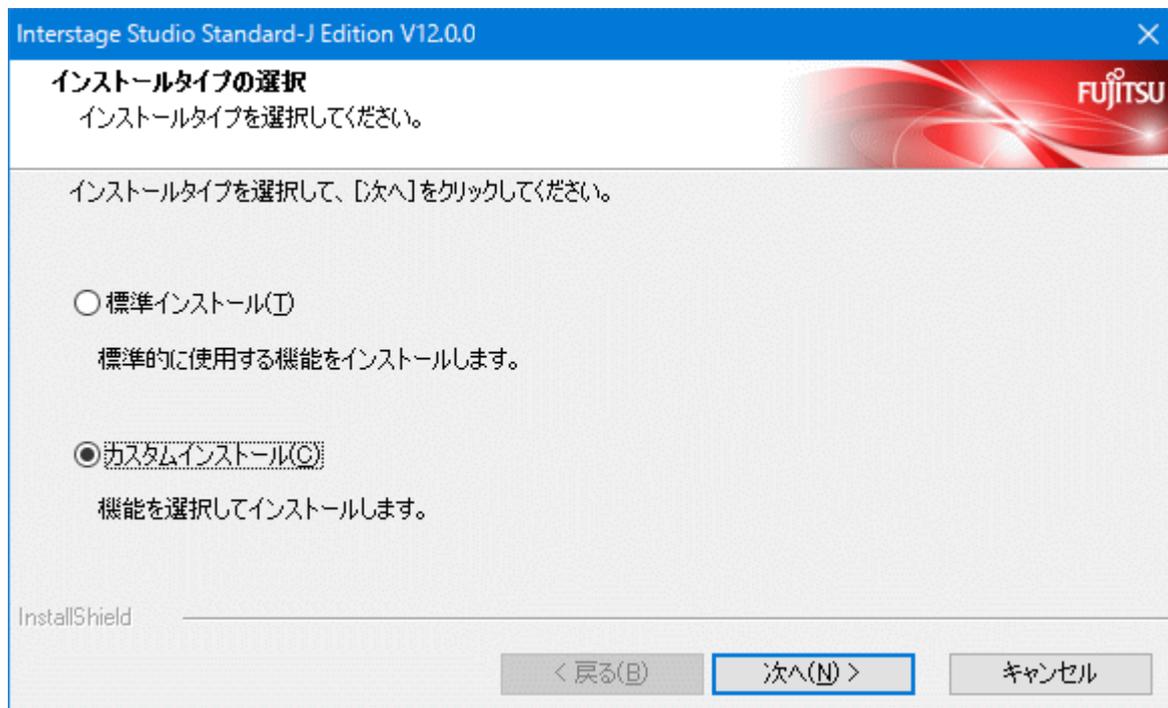
## 参考

ボタンの説明

ボタン	概要
はじめにお読みください	Interstage Studioのソフトウェア説明書を表示します。
インストールガイド	本書を表示します。
インストール	Interstage Studioのインストールを開始します。
マニュアル	オンラインマニュアルを表示します。
終了	Interstage Studioのインストールを終了します。

### 3. [カスタムインストール]を選択する

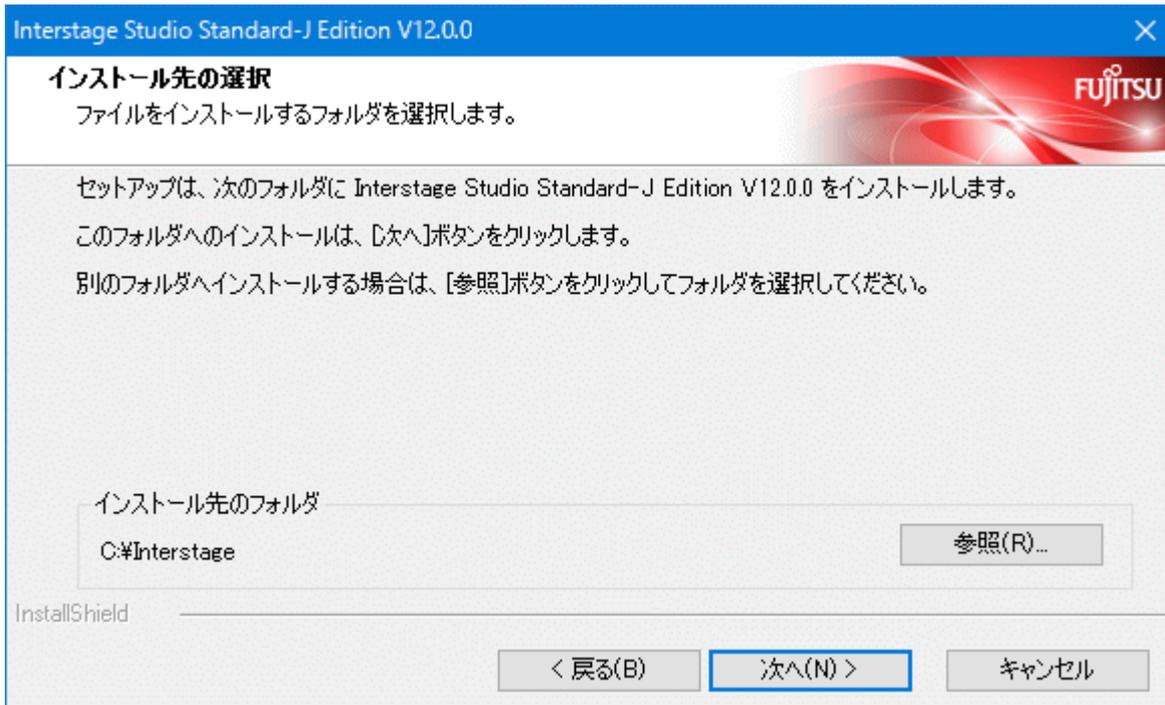
[インストールタイプの選択]画面で、セットアップ方法として[カスタムインストール]を選択し、[次へ]をクリックします。



[キャンセル]をクリックすると、インストールを中止することができます。

### 4. インストール先のフォルダを選択する

Interstage Studioのインストール先フォルダを選択する[インストール先の選択]画面が表示されます。



[インストール先のフォルダ]には、Interstage Studioのインストール先フォルダが表示されています。

- 表示されているフォルダにインストールする場合は  
[次へ]をクリックします。
- インストール先のフォルダを変更する場合は  
[参照]をクリックして、[フォルダの選択]画面を表示します。  
[フォルダの選択]画面でインストール先のフォルダを選択して、[OK]をクリックします。  
[インストール先の選択]画面の[インストール先のフォルダ]に変更した内容が表示されていることを確認し、[次へ]をクリックします。

## 注意

### インストールフォルダに関する注意事項

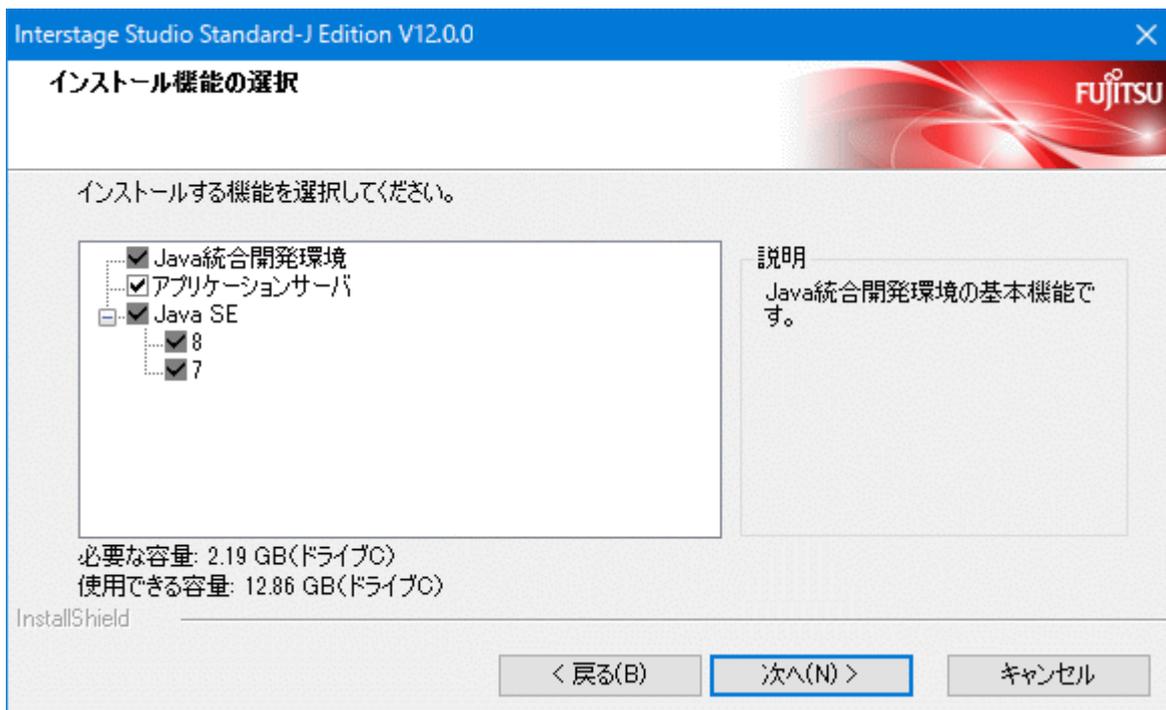
- 本製品のインストール先として別の製品のインストール先と同一のフォルダを指定する場合は、各製品のドキュメントを参照してサブフォルダやファイルが重ならないことをあらかじめ確認してください。本製品のフォルダ構成は、『Interstage Studio Standard-J Edition ソフトウェア説明書』の"フォルダ構成とファイル"で確認してください。
  - インストールフォルダ名に":", ";", "/", "\*", "?", "<", ">", "(", ")", "|", "#", "%", "^", "!", " ", "." および 全角の文字は指定できません。
  - インストール先フォルダ名として指定できる長さは、58文字以内です。
  - アプリケーションサーバをインストールする場合、インストールフォルダ名に指定できる文字は以下のとおりです。
    - 半角英数字
    - 半角スペース
    - "-"
    - "\_"
- 上記以外の文字が含まれている場合、サービスの登録や起動に失敗し、インストール処理がハングアップする場合があります。このような状態になった場合は、"[インストール処理がハングアップした場合の対処](#)"を参照して対処してください。
- 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要なければ削除してください。

## 5. インストールする機能を選択する

[インストール機能の選択]画面で、機能(コンポーネント)を選択(チェック)します。

- **選択すると**  
選択したコンポーネントがインストールされます。
- **選択を外すと**  
対象のコンポーネントはインストールされません。

網がけされているコンポーネントは、画面上で選択されたコンポーネントを使用する場合に必要なコンポーネントです。そのコンポーネントを必要としているコンポーネントの選択を外した場合に網がけ表示が解除され、選択を外すことが可能となります。



カスタムインストールでは、以下のコンポーネントを選択できます。

コンポーネント	概要	デフォルトの選択状態
アプリケーションサーバ	運用テスト環境を構成するコンポーネントです。 スタンドアロン環境でサーバアプリケーションの運用テストを行う場合に選択します。 Interstage Application Serverのクライアントパッケージと組み合わせて開発する場合は、[アプリケーションサーバ]の選択を外してインストールしてください。	選択された状態です。
Java SE	Interstage Studioを使用するために必要なコンポーネントです。 インストールするJDKのバージョン(8、7)を選択します。 JDK 8は必須コンポーネントであるため、選択を外すことはできません。	[8]および[7]が選択された状態です。

インストールするコンポーネントを選択して、[次へ]をクリックします。

## 6. ポート番号を設定する

インストールする機能として「アプリケーションサーバ」を選択している場合は、[ポート番号の設定]画面が表示されます。この画面では、Interstage Studioが使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**ポート番号の設定**  
製品が使用するポート番号を変更する場合、設定してください。

ポート番号を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	8180
Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)	80
CORBAサービス	8002

InstallShield

< 戻る(B)    **次へ(N) >**    キャンセル

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されます。

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	8180
Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)	80
CORBAサービス	8002

## 注意

### ポート番号に関する注意事項

- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。
  - 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 7. Java EE 7機能の認証情報を設定する

インストールする機能として「アプリケーションサーバ」を選択している場合は、[Java EE 7機能の認証情報の設定]画面が表示されます。この画面では、管理ユーザーIDと管理者パスワードを指定します。[管理者パスワードの確認入力]には、[管理者パスワード]と同じ文字列を入力してください。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**Java EE 7機能の認証情報の設定**  
Java EE 7機能の認証情報を設定してください。

認証情報を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

管理ユーザーID

管理者パスワード(8文字以上20文字以下)

管理者パスワードの確認入力

InstallShield

< 戻る(B)   **次へ(N) >**   キャンセル



#### 入力時の注意事項

##### [管理ユーザーID]

- 1文字以上、255文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "." (半角ピリオド)

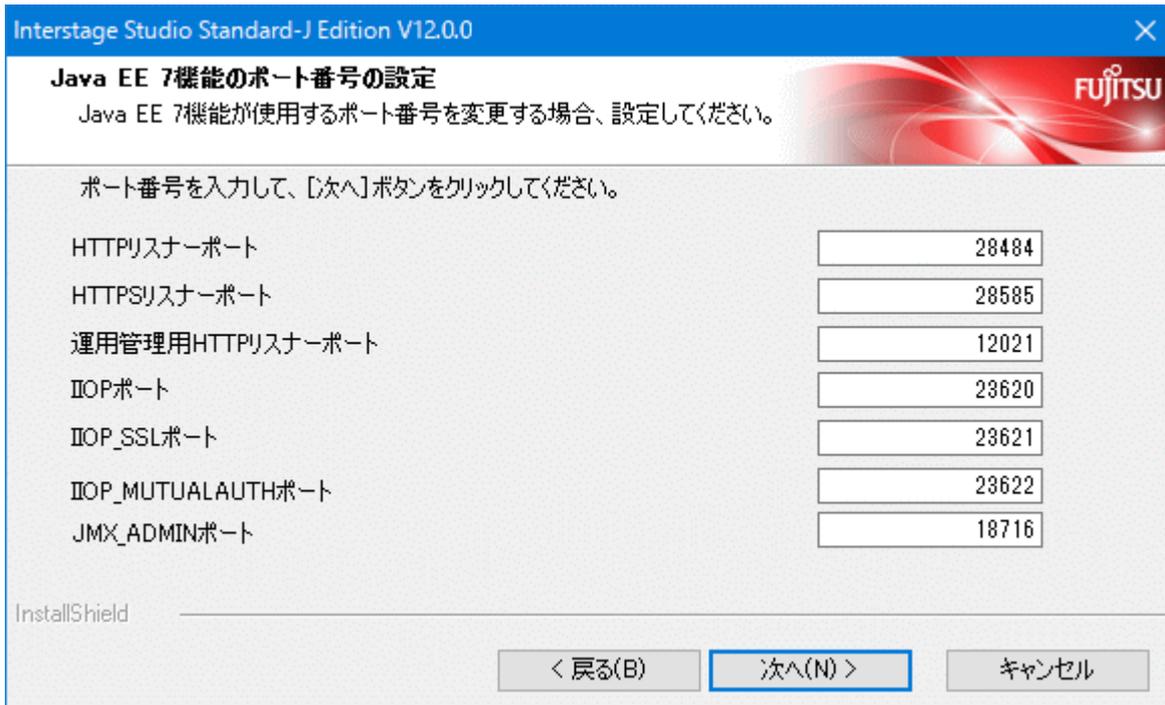
##### [管理者パスワード]

- 8文字以上、20文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "'" (半角アポストロフィー)
  - "." (半角ピリオド)
  - "@" (半角アットマーク)
  - "+" (半角プラス記号)

[次へ]をクリックします。

## 8. Java EE 7機能が使用するポート番号を設定する

インストールする機能として「アプリケーションサーバ」を選択している場合は、[Java EE 7機能のポート番号の設定]画面が表示されます。この画面では、Java EE 7機能が使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。



それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。

機能	ポート番号の初期値
HTTPリスナーポート	28484
HTTPSリスナーポート	28585
運用管理用HTTPリスナーポート	12021
IIOPポート	23620
IIOP_SSLポート	23621
IIOP_MUTUALAUTHポート	23622
JMX_ADMINポート	18716

## 注意

### ポート番号に関する注意事項

- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。  
— 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 9. Java EE 6機能の認証情報を設定する

インストールする機能として「アプリケーションサーバ」を選択している場合は、[Java EE 6機能の認証情報の設定]画面が表示されます。

この画面では、管理ユーザーIDと管理者パスワードを指定します。[管理者パスワードの確認入力]には、[管理者パスワード]と同じ文字列を入力してください。

Interstage Studio Standard-J Edition V12.0.0

**Java EE 6機能の認証情報の設定**  
Java EE 6機能の認証情報を設定してください。

認証情報を入力して、[次へ]ボタンをクリックしてください。

管理ユーザーID

管理者パスワード(8文字以上20文字以下)

管理者パスワードの確認入力

InstallShield

< 戻る(B)    次へ(N) >    キャンセル

## 注意

### 入力時の注意事項

#### [管理ユーザーID]

- 1文字以上、255文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "." (半角ピリオド)

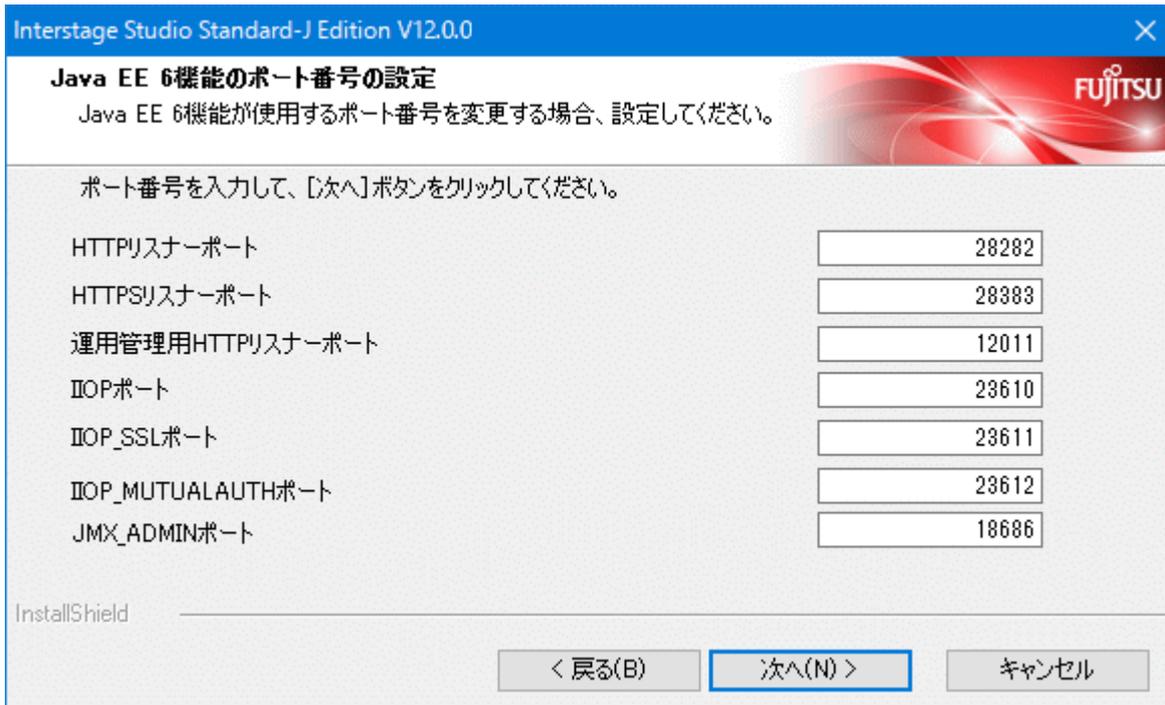
#### [管理者パスワード]

- 8文字以上、20文字以内で指定してください。
- 半角英数字に加えて以下の文字が使用可能です。
  - "\_" (半角アンダースコア)
  - "-" (半角ハイフン)
  - "'" (半角アポストロフィー)
  - "." (半角ピリオド)
  - "@" (半角アットマーク)
  - "+" (半角プラス記号)

[次へ]をクリックします。

## 10. Java EE 6機能が使用するポート番号を設定する

インストールする機能として「アプリケーションサーバ」を選択している場合は、[Java EE 6機能のポート番号の設定]画面が表示されます。この画面では、Java EE 6機能が使用するポート番号を指定します。あらかじめ初期値が設定されていますので、値を確認し、変更が必要であれば値を書き換えます。



それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。

機能	ポート番号の初期値
HTTPリスナーポート	28282
HTTPSリスナーポート	28383
運用管理用HTTPリスナーポート	12011
IIOPポート	23610
IIOP_SSLポート	23611
IIOP_MUTUALAUTHポート	23612
JMX_ADMINポート	18686

## 注意

### ポート番号に関する注意事項

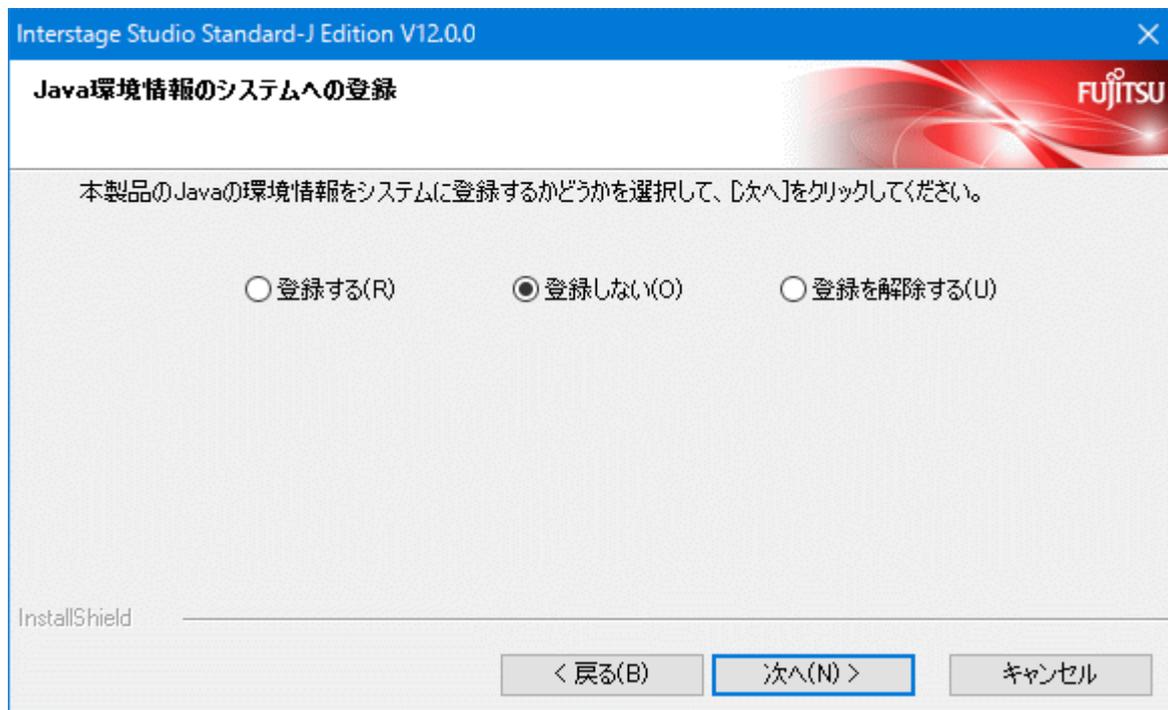
- ポート番号には、1～65535の範囲で未使用な値を、半角数字で指定します。  
指定したポート番号がすでに使用されている場合や、範囲外の値を指定した場合は、[次へ]をクリックすると[ポート番号の再設定]画面が表示されます。
- [ポート番号の再設定]画面が表示された場合は、ポート番号を再入力して[OK]をクリックします。  
ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックします。その場合、本製品のインストール後に、同じポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、そのアプリケーションが利用するポート番号を変更してください。
- 以下の範囲のポート番号は、通常エフェメラルポートに設定されていますので、使用する場合は注意が必要です。使用する場合は、「Interstage Application Server システム設計ガイド」の「ポート番号」を参照してください。
  - 49152～65535

[次へ]をクリックします。

## 11. 本製品のJava環境情報をシステムに登録するか選択する

すでにInterstage Application Server製品がコンピュータにインストールされている場合は、[Java環境情報のシステムへの登録]画面が表示されます。この画面では、本製品がインストールするJavaの環境情報をシステムに登録するかどうかを選択します。

なお、[登録を解除する]は、本製品のJavaの環境情報をシステムに登録済みである場合だけ表示されます。



- 本製品のJavaの環境情報をシステムに登録する場合  
[登録する]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 本製品のJavaの環境情報をシステムに登録しない場合  
[登録しない]を選択し、[次へ]をクリックします。
- システムに登録済みの本製品のJavaの環境情報を解除する場合  
[登録を解除する]を選択し、[次へ]をクリックします。

### 注意

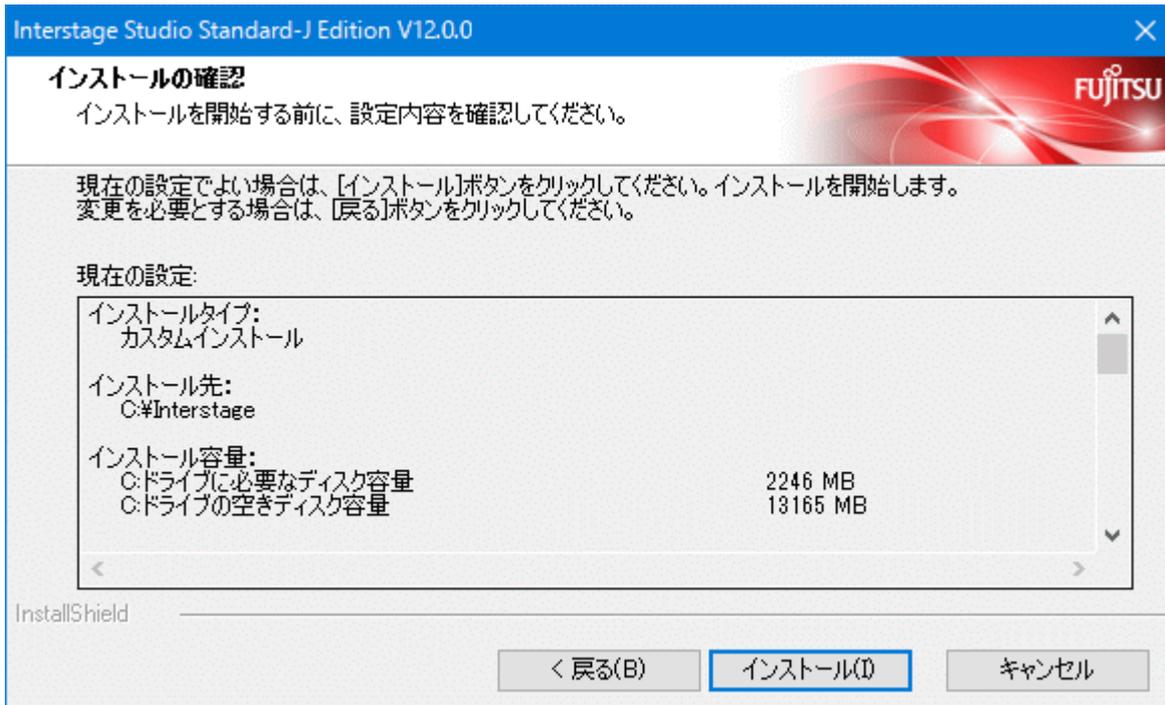
[登録する]を選択した場合、次の処理が行われます。すでに別の製品によりJDKやJREがインストールされている場合は、注意が必要です。

- 本製品がインストールするJDKおよびJBKプラグインの情報をシステムに登録します。
- システム環境変数PATH、CLASSPATH、JAVA\_HOMEの設定を行います。  
環境変数PATHおよびCLASSPATHに追加するパスについては、"[環境の確認](#)"を参照し、変数の長さが有効長を超えることがないようにしてください。

[次へ]をクリックします。

## 12. インストールの内容を確認する

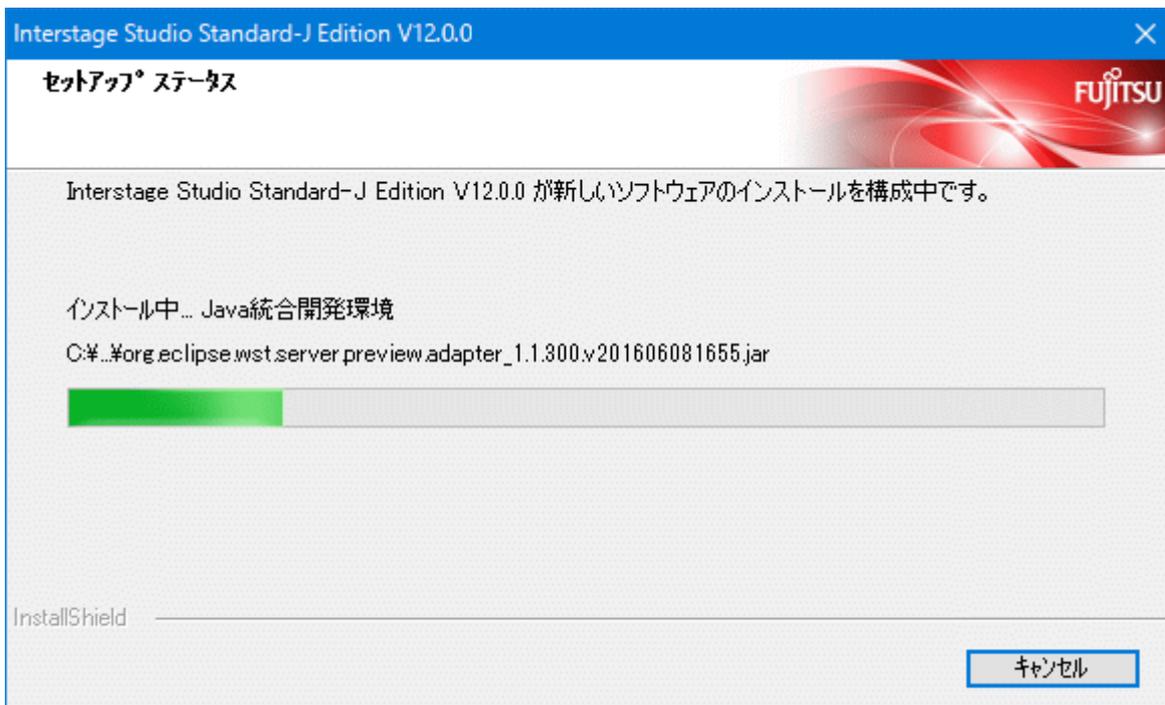
[インストールの確認]画面で、インストールの内容を確認します。



- 表示された内容で問題がない場合は  
[インストール]をクリックしてインストールを開始します。
- インストール内容を変更する場合は  
[戻る]をクリックして、設定した内容を変更します。

### 13. インストールの開始

ワークベンチやアプリケーションの開発に必要なコンポーネントおよび運用テスト環境のインストールが開始されます。インストールの進行状況は、[セットアップステータス]画面に表示されます。



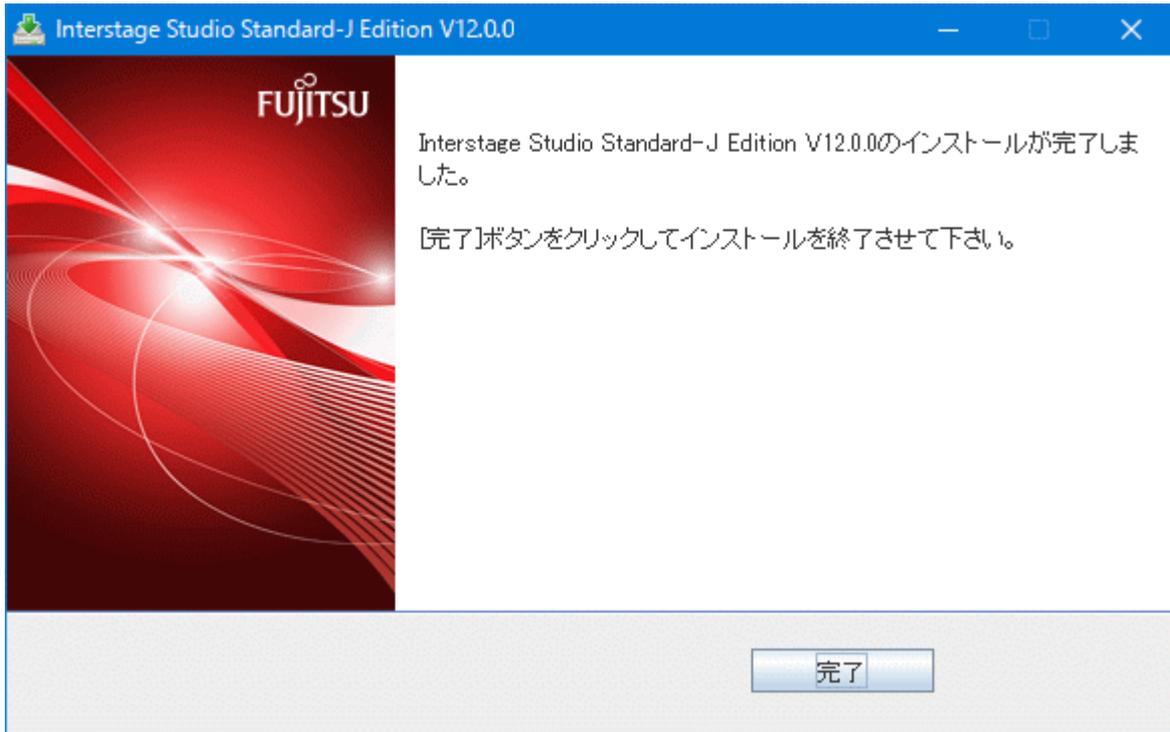
## 注意

### キャンセルについて

[セットアップステータス]画面が表示されている間は、[キャンセル]をクリックしたり、[Alt]キーと[C]キーを同時に押ししたりしないでください。キャンセル操作を行いインストール処理がハングアップしてしまった場合は、「インストール処理がハングアップした場合の対処」を参照して対処してください。

## 14. インストールの完了

Interstage Studioのインストールが完了すると、以下に示す画面が表示されます。



[完了]をクリックします。以上で、Interstage Studioのインストール作業は終了です。

[完了]をクリックしたあとは、タスクバーに表示されているインストーラのアイコンが消えるのを確認してから、コンピュータの操作を行ってください。

## 参考

### コンピュータの再起動を促す画面が表示された場合

インストール時にファイルコピーなどで異常が発生した場合、コンピュータの再起動を促す画面が表示されます。その場合、[完了]をクリックして画面を閉じたあとに、コンピュータを再起動してください。

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合のインストール処理は、コンピュータの再起動をもって完了します。

なお、Windows 8.1またはWindows 10をお使いで、高速スタートアップが有効な場合は、必ずスタートメニューまたは[電源]メニューから[再起動]を選択してシステムのリブート(再起動)を実行してください。

## 2.3.3 上書きインストール

上書きインストールの操作手順について説明します。

1. すべてのアプリケーションを終了させる
2. 製品DVDをセットする
3. [インストール情報]画面に応答する

4. インストールする機能、アンインストールする機能を選択する
5. インストールの内容を確認する
6. 上書きインストールの開始
7. インストールの完了

## 1. すべてのアプリケーションを終了させる

すべてのアプリケーションが終了していることを確認してください。

## 2. 製品DVDをセットする

製品DVDを、ご利用になるコンピュータのDVD装置にセットします。  
インストーラが自動的に起動され、以下に示す画面が表示されます。



[インストール]をクリックしてインストールを開始します。

ご使用のオペレーティングシステムの機能により、ユーザアカウント制御のダイアログボックスが表示される場合があります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行]をクリックしインストールを継続してください。

### ポイント

DVDドライブの自動実行が有効になっていない場合は、以下のコマンドを実行してください。

DVDドライブ名:¥autorun.exe



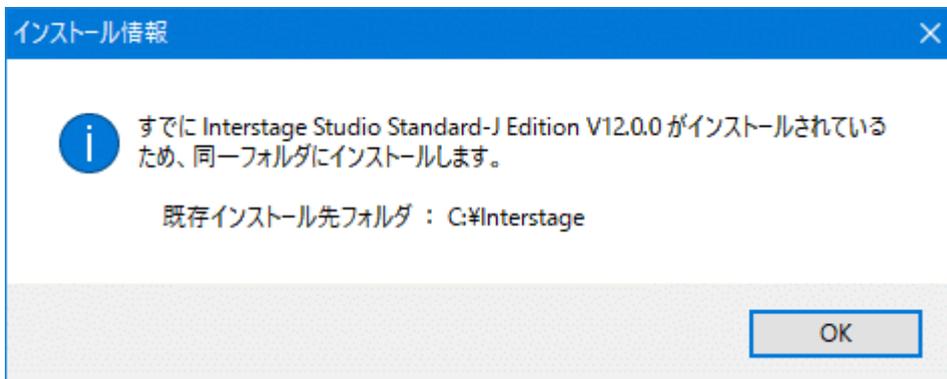
## 参考

### ボタンの説明

ボタン	概要
はじめにお読みください	Interstage Studioのソフトウェア説明書を表示します。
インストールガイド	本書を表示します。
インストール	Interstage Studioのインストールを開始します。
マニュアル	オンラインマニュアルを表示します。
終了	Interstage Studioのインストールを終了します。

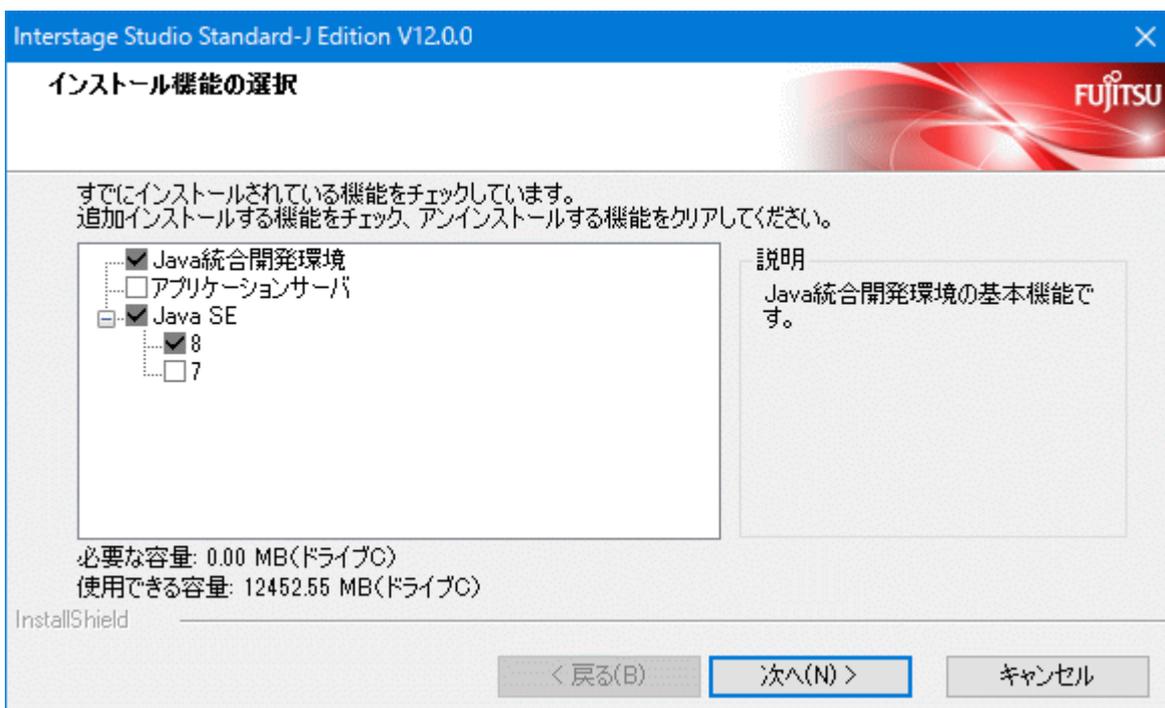
### 3. [インストール情報]画面にตอบสนองする

[OK]をクリックします。



### 4. インストールする機能、アンインストールする機能を選択する

[インストール機能の選択]画面には、現在インストールされている機能(コンポーネント)がチェックされた状態で表示されます。



[インストール機能の選択]画面から、現在のインストールの内容を変更します。

- **機能のチェックを外すと**

対象の機能がアンインストールされます。

網がけされている機能は、Interstage Studioを使用するために必要な機能です。アンインストールすることはできません。

- **機能をチェックすると**

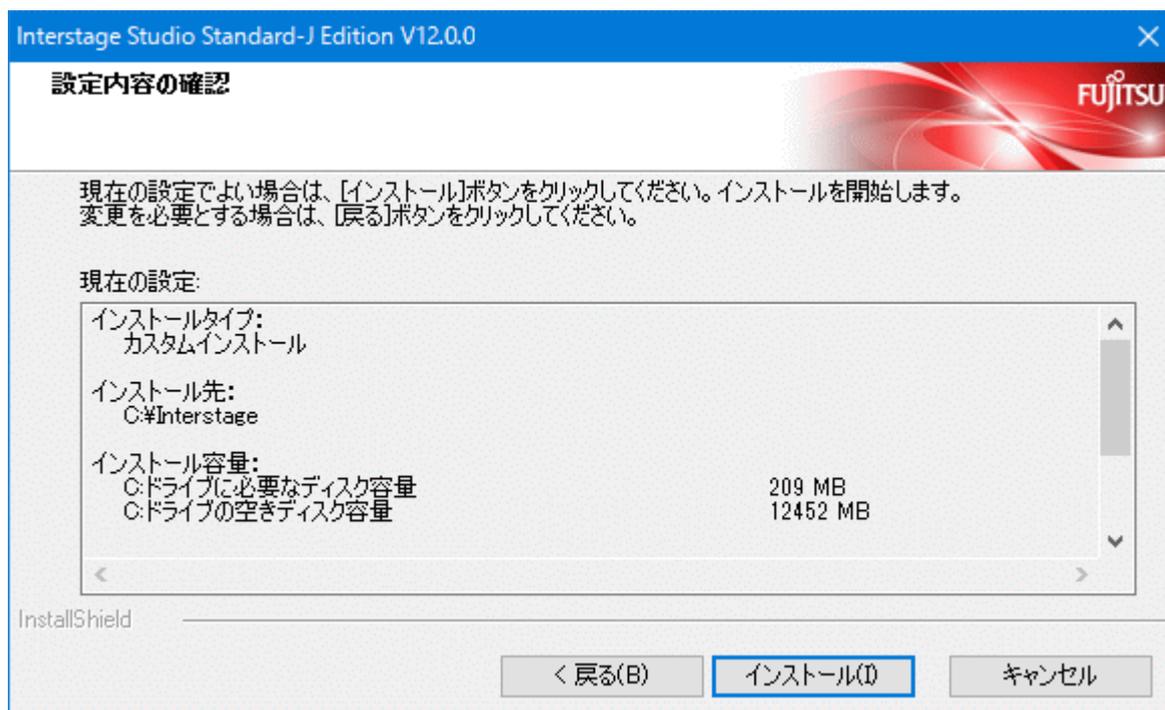
選択した機能が追加インストールされます。

インストールの内容を変更して[次へ]をクリックします。

以降の画面操作は、追加インストールまたはアンインストールによって異なります。操作手順などの詳細については、"[2.3.2 カスタムインストール](#)"を参照してください。

## 5. インストールの内容を確認する

[設定内容の確認]画面で、変更後のインストールの内容を確認します。



- 表示された内容で問題がない場合は

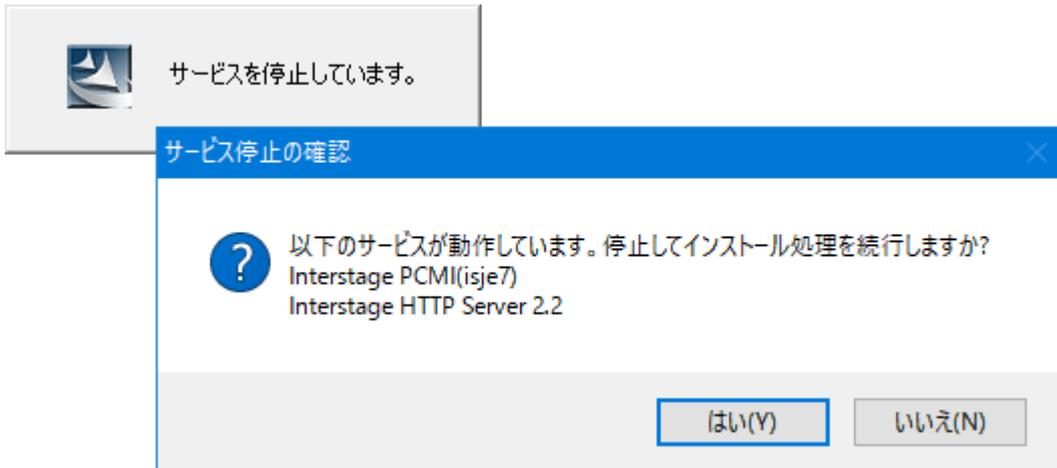
[インストール]をクリックして上書きインストールを開始します。上書きインストールを開始したあとは、[キャンセル]をクリックして中断することはできませんので、表示された内容をよく確認してください。

- インストール内容を変更する場合は

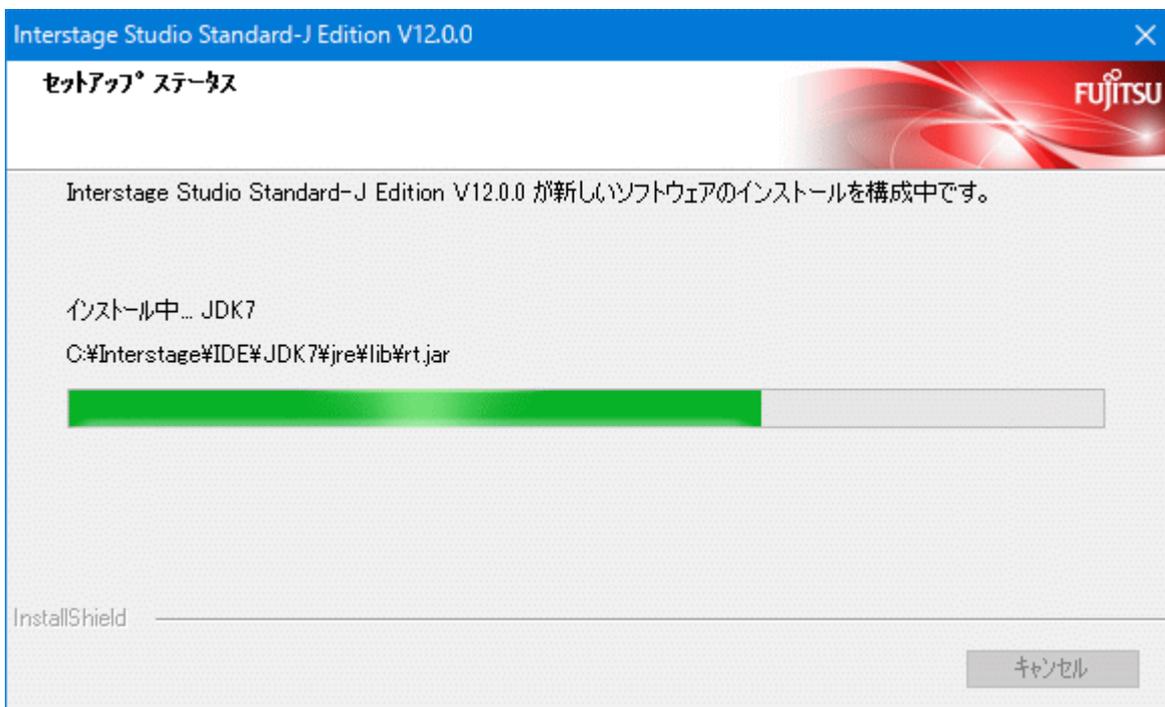
[戻る]をクリックして、インストールの内容を変更します。

## 6. 上書きインストールの開始

上書きインストールを開始する前に、アプリケーションサーバのサービスを停止します。サービスが起動されている場合には、サービスの停止を確認する[サービス停止の確認]画面が表示されます。

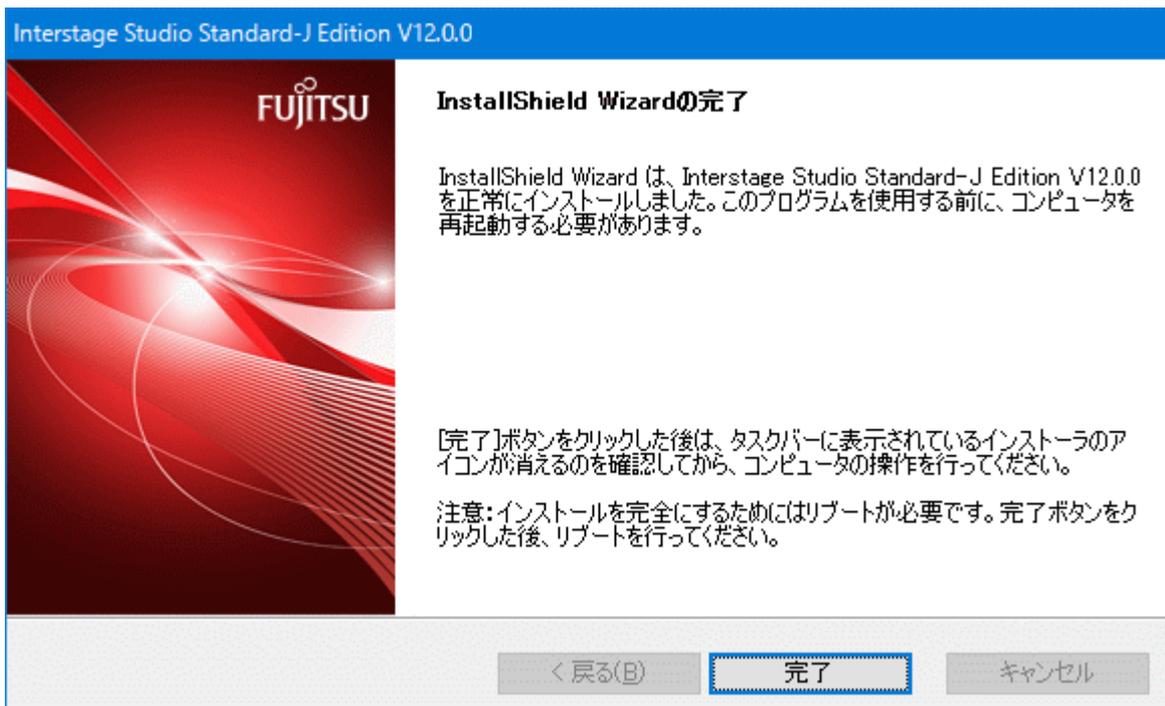


上書きインストールを開始する場合は、[はい]をクリックします。アプリケーションサーバのサービス停止後に、インストールが開始されます。インストールの進行状況は、[セットアップステータス]画面に表示されます。



## 7. インストールの完了

上書きインストールが完了すると、コンピュータの再起動を促す画面が表示されます。



[完了]をクリックします。

インストール後の状態を有効にするためには、コンピュータを再起動する必要があります。インストール完了後は、必ずコンピュータを再起動してください。

## 参考

### 高速スタートアップが有効な場合(Windows 8.1またはWindows 10)

上書きインストール後の状態を有効にするには、完全にシャットダウンしたあと再起動する必要があります。

必ずスタートメニューまたは[電源]メニューから[再起動]を選択してシステムのリブート(再起動)を実行してください。

## 2.4 インストール後の作業

### 不必要なフォルダの削除について

インストール中に[キャンセル]をクリックして処理を中断した場合などは、本製品のインストール先として指定したインストールフォルダが残ることがあります。必要に応じて削除してください。

### リモートデスクトップサービスの実行モードへの変更について

インストール前の作業で、リモートデスクトップサービスをインストールモードに変更した場合は、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスを実行モードに変更してください。

```
CHANGE USER /EXECUTE
```

実行モードへの変更は、インストール後、直ちに行ってください。

### アプリケーションサーバのサービスについて

アプリケーションサーバインストール時には、アプリケーションサーバの管理に必要なサービス(基盤サービス)が停止した状態になっています。Interstage Java EE 7管理コンソールなどアプリケーションサーバの機能を使用する場合には、Interstage基盤サービス操作ツールを用いて事前にサービスを起動してからご使用ください。

Interstage基盤サービス操作ツールを起動するには、スタートメニューの[すべてのプログラム]>[Interstage Studio V12.0]>[Interstage基盤サービス操作ツール]を選択します。Interstage基盤サービス操作ツールの詳細は、ツール画面の[ヘルプ]をクリックして表示されるヘルプドキュメントを参照してください。

## インストール資源のセキュリティ強化

Interstage Studioでは、一般ユーザによる資源の改ざんを防ぐために、NTFS形式のドライブにインストールした場合、インストール資源のアクセス権を変更することができます。

issetfoldersecurityコマンドを使用して、Interstage Studioのインストールフォルダ配下のフォルダおよびファイルに対して、不特定のユーザからのアクセスを防ぐ権限に変更することができます。issetfoldersecurityコマンドについては、"Interstage Application Server リファレンスマニュアル(コマンド編)"を参照してください。

なお、以下に示すアプリケーションサーバの各種操作を一般ユーザ(コンピュータの管理者およびAdministratorsグループに属さないメンバ)で実施する場合、Interstage Studioインストールフォルダ配下のすべてのフォルダおよびファイルに、操作を行う一般ユーザのアクセス権を設定する必要があります。この場合、issetfoldersecurityコマンドに対して、アクセス権を設定するユーザ名またはグループ名を指定してください。

- CORBAサービスの以下のコマンド実行時
  - odlistnsコマンド
  - IDLcコマンド
  - odlistirコマンド
- odwin.dllを使用したCORBAアプリケーションを使用する場合
- EJBサービス運用コマンド実行時
- ワークユニット管理コマンド実行時
- Interstage運用API使用時
- イベントサービス運用コマンド実行時
- JMS運用コマンド実行時
- Durable Subscription機能を使用したJMS受信アプリケーションを使用する場合
- バックアップコマンド実行時
- Interstage証明書環境を利用し、SSLなど署名や暗号処理を実施する場合

## IJServer、IJServerクラスタ、CORBAワークユニットの作成について

動作確認用のIJServer(MyDebug/My1VMDebug)、IJServerクラスタ(MyDebugJEE)およびCORBAワークユニット(MyCORBADebug)が必要な場合は以下を参照して作成してください。

- IJServer(MyDebug/My1VMDebug)が必要な場合は、"Interstage Studio ユーザーズガイド"の"J2EE1.4アプリケーションの開発について" > "J2EEアプリケーション共通事項" > "アプリケーションの動作確認を行う配備先の準備"を参照してください。
- IJServerクラスタ(MyDebugJEE)が必要な場合は、Interstage Java EE 7管理コンソールまたはasadminコマンドを使用して作成してください。詳細は、"Interstage Studio ユーザーズガイド"の"Java EE 7アプリケーション共通事項" > "タスク" > "アプリケーションの動作確認を行う配備先の準備"を参照してください。
- CORBAワークユニット(MyCORBADebug)が必要な場合は、Interstage 管理コンソールまたはisaddwudefコマンドを使用して作成してください。詳細は、"Interstage Application Server 運用ガイド(基本編)"を参照してください。

## 2.5 インストール時のトラブル対処方法

---

### 環境変数の設定に失敗した場合

インストール終了時に以下のいずれかのメッセージが表示された場合、環境変数の設定に失敗しています。

- Interstage Studioで必要な環境変数の設定ができませんでした。  
以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATH変数を設定してください。
- Interstage Studioで必要な環境変数の設定ができませんでした。  
以下のファイルを参照し、システム環境変数にCLASSPATH変数を設定してください。
- Interstage Studioで必要な環境変数の設定ができませんでした。  
以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATH変数、CLASSPATH変数を設定してください。

上記の場合、以下の手順に従ってシステム環境変数のPATH変数、CLASSPATH変数を設定してください。  
ただし、直前に「Java EE 7のセットアップでエラーが発生しました。」のダイアログが表示された場合は、「[Java EE 7機能のセットアップに失敗した場合](#)」を参照してください。

1. PATH、CLASSPATHの各変数の内容(変数値)を表示します。
  - [コントロールパネル]の[システムとセキュリティ]を選択します。次に[システム]を選択し、[設定の変更]をクリックします。[詳細設定]タブから[環境変数]をクリックします。[システム環境変数]内の"PATH"、"CLASSPATH"部を選択し、[編集]をクリックして[システム変数の編集]画面を表示します。[変数値]ボックス内に、現在の変数値が表示されます。
2. 不必要なパスを削除します。
3. 以下に示す各ファイルに記述されている変数値を各環境変数に追加します。
  - <インストールフォルダ>\IDE\1200\path.txt  
PATH変数に追加する設定値です。システム環境変数に追加します。
  - <インストールフォルダ>\IDE\1200\classpath.txt  
CLASSPATH変数に追加する設定値です。システム環境変数に追加します。
4. [OK]をクリックして、設定した内容を格納します。
5. コンピュータを再起動します。

### リモートデスクトップサービスが実行モードの場合

インストール時に以下の現象が発生した場合、リモートデスクトップサービスが実行モードの可能性あります。

- 以下のメッセージが出力された場合  
「エラー番号:0x80040702 詳細:dllのロードに失敗しました。:odautosetup」
- イベントビューアにメッセージihs00012が出力された場合
- インストールが失敗し、「エラー: is20102:INTERSTAGEの起動に失敗しました 理由コード(10)」のポップアップが出力された場合

上記の場合、本製品をアンインストールしたあと、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスをインストールモードに変更し、再度インストールを実施してください。

```
CHANGE USER /INSTALL
```

本製品のインストール完了後、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスを実行モードに変更してください。

```
CHANGE USER /EXECUTE
```

### インストール処理がハングアップした場合の対処

インストールフォルダ名に指定できない文字が含まれていた場合や、セットアップステータス表示中にキャンセル操作を実施した場合に、サービスの登録や起動に失敗した旨のポップアップメッセージが表示され、インストール処理がハングアップすることがあります。  
このような状態になった場合は「[付録A インストール環境の削除](#)」を参照し、Interstage Studioの資産・情報を手動で削除したあと、本製品の再インストールを実施してください。

### Java EE 7機能のセットアップに失敗した場合

インストール中、ダイアログに「Java EE 7のセットアップでエラーが発生しました」と表示された場合は、環境変数TMPフォルダ配下に出力されるf5drinst\_1200.logを参照してください。

上記ファイル中にメッセージ番号がIJ7INITで始まるメッセージが出力されている場合は、メッセージに従って原因を取り除いてから再度インストールを行ってください。

同時に、環境変数の設定に失敗した場合は、アンインストールして、環境変数PATHから不要な値を削除してから再度インストールを行ってください。インストール時に環境変数PATHに指定する値の長さは1024[byte]以下に設定します。アンインストールに失敗する場合は、「[付録A インストール環境の削除](#)」を参照して対処してください。

### Java EE 6機能のセットアップに失敗した場合

インストール中、ダイアログに「Java EE 6のセットアップでエラーが発生しました」と表示された場合は、環境変数TMPフォルダ配下に出力されるf5drinst\_1200.logを参照してください。

上記ファイル中にメッセージ番号がIJ6INITで始まるメッセージが出力されている場合は、メッセージに従って原因を取り除いてから再度インストールを行ってください。

### Interstage HTTP Server 2.2サービスの登録処理でエラーが発生した場合

以下に該当する場合、オペレーティングシステムに必要な更新プログラムがインストールされていません。

- ・ 本製品をWindows 8.1またはWindows Server 2012 R2にインストールしようとしている。かつ
- ・ オペレーティングシステムに、更新プログラム2919355がインストールされていない。

上の条件に合致する場合は、以下の作業を実施してください。

1. 本製品をアンインストールする。  
アンインストールに失敗する場合は、「[付録A インストール環境の削除](#)」に従って対処してください。
2. オペレーティングシステムに最新の更新プログラムをインストールする。
3. 本製品を再度インストールする。

## 第3章 アンインストール作業

Interstage Studioのアンインストール手順について説明します。なお、Interstage Studioのアンインストール作業は、コンピュータの管理者またはAdministratorsグループのメンバで実施してください。



アンインストールの各作業は、Interstage Studioのセットアップ方法で「標準インストール」を選択してインストールした場合を前提に説明しています。

### 3.1 アンインストール前の作業

アンインストールを行う前に、以下の作業を行ってください。

- ・ アプリケーションの停止
- ・ 資産の退避
- ・ その他

#### アプリケーションの停止

以下に示す項目について確認し、必要であれば対応してください。

- ・ アプリケーションを停止する

すべてのアプリケーションを終了させてください。

Interstage Studioをアンインストールする際に、Interstage Studioが利用するディスク、レジストリなどの資源を使用しているとアンインストール作業に失敗する場合があります(例: イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタなど)。

- ・ スクリーンセーバーについて

スクリーンセーバーが起動されるように設定されていると、アンインストールの動作が不安定になる場合があります。スクリーンセーバーの設定を"(なし)"にしてからアンインストールを行ってください。

#### 資産の退避

必要に応じ、Java統合開発環境および運用テスト環境の各環境上の資源(資産)の退避を行ってください。

- ・ Java統合開発環境

以下のフォルダに、利用者の資産が格納されます。利用者の資産が格納されている場合は、アンインストールしてもフォルダは削除されずに残ります。利用者の資産が不要ならば、アンインストール後に削除してください。ワークスペースフォルダをデフォルトの場所から変更していた場合は、そのフォルダ配下の資産についても確認をしてください。

- <ユーザのホームフォルダ>%Interstage Studio%\12.0.0
- <ユーザのドキュメントフォルダ>%Interstage Studio%\12.0\workspace

- ・ 運用テスト環境

アプリケーションサーバに関する資源の退避については、"Interstage Application Server 運用ガイド(基本編)"を参照してください。

#### その他

以下に示す項目について確認し、必要であれば対応してください。

- ・ リモートデスクトップサービスのインストールモードへの変更について

リモートデスクトップサービスが実行モードの状態の場合は、インストールモードに変更する必要があります。

Interstage Studioのアンインストール前に、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスをインストールモードに変更してください。

## 3.2 アンインストール時の注意事項

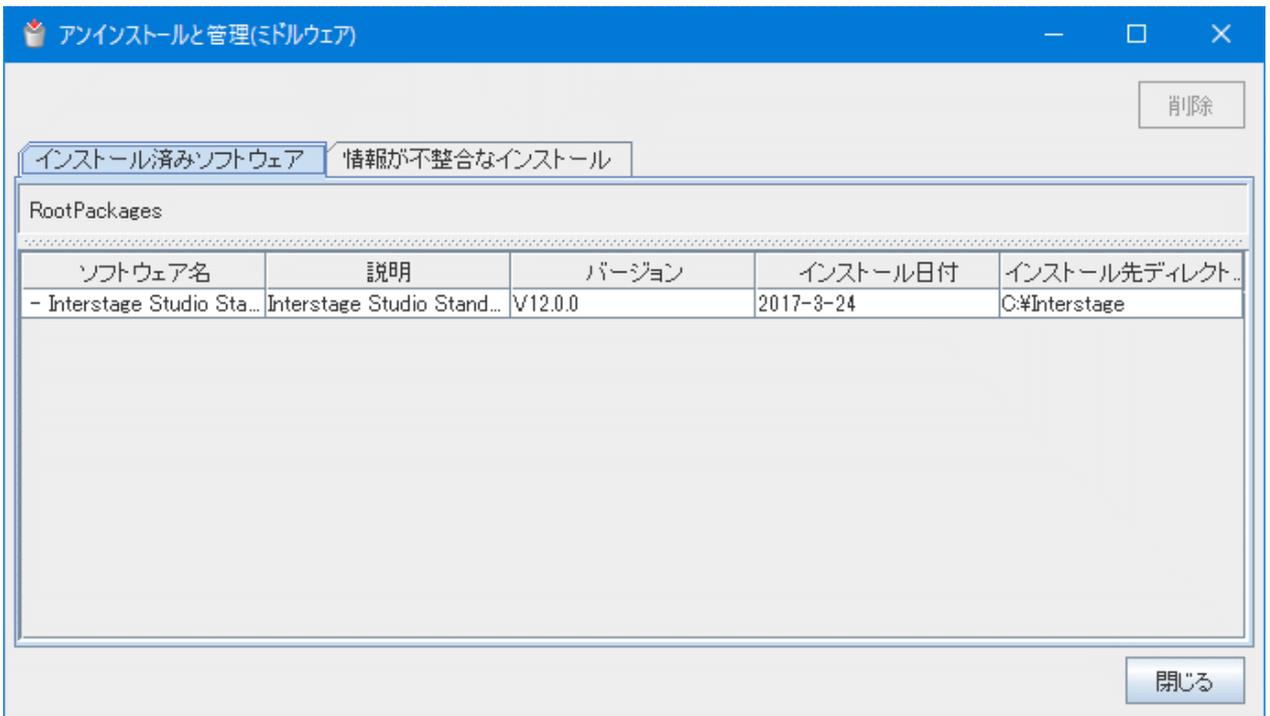
ここでは、アンインストール時の注意事項について説明します。

- コンピュータ起動直後にアンインストールを実施した場合、サービスが起動処理中のために、アンインストールが失敗することがあります。この場合、時間をおいて再度アンインストールを行ってください。
- 下記のメッセージが出力された場合は、10分以上時間をおいて再度アンインストールを実施してください。  
以下のサービスが停止できませんでした。  
Interstage JServlet(OperationManagement)
- インストール時に[Java環境情報のシステムへの登録]画面で[登録する]を選択していた場合は、本製品をアンインストールすると、本製品がシステムに登録していたJavaの環境情報は削除されます。
- アンインストール途中で強制終了した場合、以後アンインストールを完了することができないことがあります。この場合、"[付録A インストール環境の削除](#)"を参照し、Interstage Studioの資産・情報を手動で削除してください。

## 3.3 アンインストール作業

以下に示す手順で、Interstage Studioのアンインストールを行ってください。

1. スタートメニューの[すべてのプログラム] > [Fujitsu] > [アンインストールと管理(ミドルウェア)]をクリックします。  
[アンインストールと管理(ミドルウェア)]画面が表示されます。



2. [ソフトウェア名]から[Interstage Studio Standard-J Edition]を選択して、[削除]をクリックすると、次の画面が表示されます。



製品名を確認して問題がなければ[アンインストール]をクリックしてください。アンインストールを中止する場合は、[キャンセル]をクリックしてください。

[アンインストール]をクリックするとInterstage Studioのアンインストールが開始されます。

3. アンインストールが完了すると、次の画面が表示されます。



アンインストール後の状態を有効にするためには、コンピュータを再起動する必要があります。本画面および[アンインストールと管理 (ミドルウェア)]画面を終了させてから、再起動を行ってください。



## 参考

### 高速スタートアップが有効な場合(Windows 8.1またはWindows 10)

アンインストール後の状態を有効にするには、完全にシャットダウンしたあと再起動する必要があります。  
必ずスタートメニューまたは[電源]メニューから[再起動]を選択してシステムのリブート(再起動)を実行してください。

## ポイント

次のコンポーネントは富士通ミドルウェア製品が共通に利用するコンポーネントであるため、本製品をアンインストールしても削除されません。

- ・ アンインストールと管理(ミドルウェア)

## 3.4 アンインストール後の作業

ここでは、Interstage Studioのアンインストールを行ったあとに行う作業について説明します。

### フォルダの削除

Interstage Studioのアンインストールにおいて、インストールフォルダやユーザのホームフォルダの配下にサブフォルダやファイルが残る場合があります。必要に応じて、インストールフォルダおよびホームフォルダ配下に残っている不要なフォルダやファイルを削除してください。

#### Java統合開発環境のフォルダについて

ワークベンチを機能拡張するプラグインが他製品からインストールされていた場合、本製品をアンインストールしても以下のフォルダが残ります。プラグイン提供製品のドキュメントを参照し、不要ならば削除してください。

- ・ <インストールフォルダ>%IDE%1200\_WB46\eclipse\dropins
- ・ <インストールフォルダ>%IDE%1200\_WB46\eclipse\features
- ・ <インストールフォルダ>%IDE%1200\_WB46\eclipse\p2
- ・ <インストールフォルダ>%IDE%1200\_WB46\eclipse\plugins

以下のフォルダに、利用者の資産が格納されている場合は、アンインストールしてもフォルダが残ります。  
利用者の資産が不要ならば削除してください。

- ・ <ユーザのホームフォルダ>%Interstage Studio%\V12.0.0
- ・ <ユーザのドキュメントフォルダ>%Interstage Studio%\V12.0%\workspace

ワークベンチからCVSリポジトリの追加を行うと、以下に.eclipseフォルダが作成され、アンインストールしてもフォルダが残ります。不要ならば削除してください。

- ・ <ユーザのホームフォルダ>%eclipse

#### アプリケーションサーバのフォルダについて

運用テスト環境を構成するコンポーネントの"アプリケーションサーバ"をインストールしている場合に必要な作業です。  
以下のフォルダが残っているときは、削除してください。

- ・ <インストールフォルダ>%APS%etc
- ・ <インストールフォルダ>%APS%var
- ・ <インストールフォルダ>%APS%var%rc
- ・ <インストールフォルダ>%APS%var%repository (注1)
- ・ <インストールフォルダ>%APS%\F3FMihs (注2)
- ・ <インストールフォルダ>%APS%\F3FMahs (注3)

- <インストールフォルダ>%APS%ODWIN%etc
- <インストールフォルダ>%APS%ODWIN%var
- <インストールフォルダ>%APS%td%bin
- <インストールフォルダ>%APS%td%etc
- <インストールフォルダ>%APS%td%isp
- <インストールフォルダ>%APS%td%var (注4)
- <インストールフォルダ>%APS%td%trc
- <インストールフォルダ>%APS%MessageQueueDirector
- <インストールフォルダ>%APS%EJB%var
- <インストールフォルダ>%APS%EJB%etc
- <インストールフォルダ>%APS%eswin%etc
- <インストールフォルダ>%APS%eswin%var
- <インストールフォルダ>%APS%Extp%etc
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%so%ssocm
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%so%ssocatcsv (注5)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%so%ssocatg (注5)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%so%ssofsv (注5)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%so%ssoatzg (注5)
- <インストールフォルダ>%APS%fsvl (注5)
- <インストールフォルダ>%APS%GUI%trc
- <インストールフォルダ>%APS%IREP
- <インストールフォルダ>%APS%IREPSDK
- <インストールフォルダ>%APS%J2EE
- <インストールフォルダ>%APS%jms
- <インストールフォルダ>%APS%jms%etc
- <インストールフォルダ>%APS%jms%var
- <インストールフォルダ>%APS%ots%etc (注6)
- <インストールフォルダ>%APS%ots%var (注6)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%isje6 (注7)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%isje7 (注8)
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%js2su
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%js5
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%jssrc
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%jssrs
- <インストールフォルダ>%APS%F3FM%pcmi
- <インストールフォルダ>%APS%Porb

注1) 業務構成管理機能の“リポジトリの格納先”を変更した場合は、そちらを削除してください。また、次回インストール時に、前回の情報を再利用する場合は、本フォルダは削除しないでください。次回インストール時に同じフォルダを指定することで、情報を引き継ぐこ

とができます。

**注2)** Webサーバ(Interstage HTTP Server)の環境定義ファイルおよびログファイルなどが保存されています。必要に応じて削除する前にフォルダ配下のファイルを退避してください。

**注3)** Webサーバ(Interstage HTTP Server 2.2)の環境定義ファイルおよびログファイルなどが保存されています。必要に応じて削除する前にフォルダ配下のファイルを退避してください。

**注4)** Systemwalker CentricMGR 運用管理サーバまたは、Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバがインストールされている場合は、<インストールフォルダ>%APS%\td%\var%\IRDBは削除しないでください。

**注5)** Interstage シングル・サインオンの環境定義ファイルおよびログファイルなどが保存されています。必要に応じて削除する前にフォルダ配下のファイルを退避してください。

**注6)** フォルダ配下にファイルまたはフォルダが存在する場合は、それらも含めてすべて削除するようにしてください。

**注7)** Java EE 6の環境定義ファイルおよびログファイルなどが保存されています。必要に応じて削除する前にフォルダ配下のファイルを退避してください。

**注8)** Java EE 7の環境定義ファイルおよびログファイルなどが保存されています。必要に応じて削除する前にフォルダ配下のファイルを退避してください。

## JDKのフォルダについて

JDKのインストールフォルダに利用者の資産が残っている場合は、Interstage Studioをアンインストールしても以下のJDKのフォルダが残ります。利用者の資産が不要な場合は削除してください。

- JDK 8をインストールしていた場合  
<インストールフォルダ>%IDE%\JDK8
- JDK 7をインストールしていた場合  
<インストールフォルダ>%IDE%\JDK7

ただし、Interstage Studioをインストールしたあとに、他のアプリケーションをインストール、またはアップデートすると、JDKのフォルダにファイルがコピーされる場合があります。このようなファイルも、Interstage Studioをアンインストールしても削除されずに残ります。この場合は、アンインストール後に、該当ファイルを削除してください。

例: Interstage Studioをインストール後に、Windows Media Playerをアップデートすると、以下のフォルダにWMPNS.jarがコピーされます。

- JDK 8がインストールされていた場合  
<インストールフォルダ>%IDE%\JDK8%\jre%\lib%\applet
- JDK 7がインストールされていた場合  
<インストールフォルダ>%IDE%\JDK7%\jre%\lib%\applet

## 本製品を再インストールする場合の作業

アンインストール後に本製品を再インストールする場合は、本製品の再インストール前にコンピュータを再起動する必要があります。また、再インストールする場合は、前回のインストール資源を削除してからインストールしてください。

## 環境変数の削除

システム環境変数のCLASSPATHに"."が残ることがあります。必要に応じて削除してください。

システム環境変数PATH、CLASSPATHに手動でパスを設定した場合、アンインストールしてもパスが残ることがあります。必要がない場合は、削除してください。

## アプリケーションサーバをインストールしていた場合

- Interstage Java EE 7のアンインストール後に、サービスに「Interstage PCMI(isje7)」が残存している場合は、scコマンドを以下のように実行して、サービス「Interstage PCMI(isje7)」を削除してください。

```
sc delete "Interstage PCMI(isje7)"
```

- Interstage Java EE 6のアンインストール後に、サービスに「Interstage PCMI(isje6)」が残存している場合は、scコマンドを以下のように実行して、サービス「Interstage PCMI(isje6)」を削除してください。

```
sc delete "Interstage PCMI(isje6)"
```

## その他の作業

- 本製品が利用していた以下に示す再頒布パッケージが不要である場合は、削除してください。
  - Microsoft Visual C++ 2010 SP1 再頒布可能パッケージ (x86)
  - Microsoft Visual C++ 2013 再頒布可能パッケージ (x86)
  - Microsoft Visual C++ 2015 再頒布可能パッケージ Update 3 (x86)

再頒布パッケージは、[コントロールパネル]の[プログラムと機能]から削除することができます。

- リモートデスクトップサービスがインストールモードの状態の場合は、以下のコマンドを実行して、リモートデスクトップサービスを実行モードに変更してください。

```
CHANGE USER /EXECUTE
```

## 付録A インストール環境の削除

ここでは、Interstage Studioのインストールまたはアンインストール時の不測の事態により、以降再インストールまたはアンインストールが正常に動作しなくなった場合にだけ実施する“緊急対処用作業”について説明します。

以下の手順を実施しご利用の環境から本製品に関する資産・情報を削除することで、元の環境に復旧することができます。ただし、同一システム上に関連製品がすでに混在してインストールされている場合には、あらかじめそれらの製品のアンインストールを行った上で以下の作業を実施してください。

### 注意

- 作業は、コンピュータの管理者またはAdministratorsグループのメンバで実施してください。
- インストールされている機能の有無により、記載しているレジストリキーやフォルダ、環境変数などが存在しない場合があります。その場合は、無視して作業を進めてください。
- 以降の説明には、レジストリの編集に関する情報が含まれています。レジストリを編集する前に、万一問題が発生した場合の復元方法を理解しておく必要があります。この方法については、レジストリエディタ(regedit.exe)のヘルプメニューの「レジストリを復元する」を参照してください。  
レジストリはWindowsシステムの非常に重要なファイルです。操作に失敗すると、Windowsが起動しなくなる恐れもありますので、十分注意して作業をしてください。

ここでは、OSのインストール先を"C:\Windows"、製品のインストール先を"C:\Interstage"とし、32ビット版OSにインストールした場合を例に説明しています。64ビット版OSにインストールした場合は、以下の表に従い読み替えてください。

32ビット版OS	64ビット版OS
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu	HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Fujitsu
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows	HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Microsoft¥Windows
C:\Program Files	C:\Program Files (x86)
C:\Windows¥System32	C:\Windows¥SysWOW64

以降に記載の「特定の機能」とは、以下の機能を指します。

- アプリケーションサーバ

以降に記載の「～が搭載された他製品」についてご不明な場合は当社技術員にお問い合わせください。

### 関連製品のアンインストール

本製品の関連製品(個別ソフトウェアなど)がすでにインストールされている場合には、アンインストールを実施してください。関連製品のアンインストールについては、各製品のソフトウェア説明書を参照してください。

### 本製品の削除

以下に、本製品の各コンポーネントのインストール環境の削除手順を示します。

#### 1. サービスを停止する

以下のサービスを停止します。

- EventFactory
- EventService
- FJapache
- InterfaceRep\_Cache Service
- InterfaceRep\_Cache\_e Service

- INTERSTAGE
- Interstage Directory Service
- Interstage HTTP Server 2.2
- Interstage JServlet(OperationManagement)
- Interstage Message Queue Broker(ISJE6)
- Interstage Message Queue Broker(ISJE7)
- Interstage Operation Tool
- Interstage Operation Tool(FJapache)
- Interstage PCMI(isje6)
- Interstage PCMI(isje7)
- Interstage Server Monitor Service
- Interstage Server Monitor Service(Cache Manager)
- Naming Service
- ObjectTransactionService
- OD\_start
- TransactionDirector

## 2. レジストリを削除する

レジストリエディタ(Windowsフォルダ配下の"regedit.exe")を起動し、以下のレジストリキーを削除します。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu配下の以下のキー
  - APWORKS (\*1)
  - Interstage Studio (\*1)

\*1: HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Interstage IDEキー配下に「1200」以外のキーが存在する場合は削除しないでください。
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥FJQSS配下の以下のキー
  - INTS-STDSJE1\_V12.0.0
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install配下の以下のキー
  - Interstage Studio (\*2)

\*2: HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Interstage IDEキー配下に「1200」以外のキーが存在する場合は削除しないでください。
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Interstage IDE配下の以下のキー
  - 1200



上記のキーを削除した結果、「HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Interstage IDE」配下にキーが存在しない場合は、以下も削除してください。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install配下の以下のキー
  - Interstage IDE

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall配下の以下のキー
  - {0AA137CF-790C-4CB3-B520-D191548A79A2}

以下のレジストリキーは特定の機能が搭載された他製品がインストールされている場合に共通のレジストリキーとなります。特定の機能が搭載された他製品をアンインストール後、以下のレジストリキーが存在する場合だけ、削除してください。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu配下の以下のキー
  - AHS
  - EventService
  - Extp

- F3FMirep
  - F3FMisje6
  - F3FMisje7
  - F3FMisjmx
  - F3FMjs2su
  - F3FSSMEE
  - FJapache
  - FJFSVL
  - FjsvSvMon
  - Interstage JMS
  - Interstage Operation Tool
  - Interstage Single Sign-on
  - IREPSDK
  - MessageQueueDirector
  - ObjectDirector Portable-ORB
  - ObjectDirector Server
  - ObjectTransactionService
  - OD\_Parent
  - SecurecryptoLibraryCommon
  - TransactionDirector
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install配下の以下のキー
    - AHS
    - EJB\_IOP
    - EventService
    - Extp
    - F3FMirep
    - F3FMisje6
    - F3FMisje7
    - F3FMisjmx
    - F3FMjs2su
    - F3FMjs5
    - F3FMjssrc
    - F3FMjssrs
    - F3FMpcmi
    - F3FMwsc
    - F3FSSMEE
    - FJapache
    - FJFSVL
    - FJSVj2ee
    - FJSVj2eer
    - FjsvSvMon
    - Interstage
    - Interstage JMS
    - Interstage Operation Tool
    - Interstage Single Sign-on
    - IREPSDK
    - MessageQueueDirector
    - ObjectDirector Portable-ORB
    - ObjectDirector Server
    - ObjectTransactionService
    - Securecrypto Library R
    - TransactionDirector
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall配下の以下のキー
    - EJB\_IOP

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services配下の以下のキー
  - F3FMjs2su
  - F3FMsvmond
  - F3FMsvmonobservd
  - FJapache
  - InterfaceRep\_Cache\_s
  - InterfaceRep\_e
  - INTERSTAGE
  - Interstage Message Queue Broker(ISJE6)
  - Interstage Message Queue Broker(ISJE7)
  - Interstage Operation Tool
  - Interstage PCMI(isje6)
  - Interstage PCMI(isje7)
  - InterstageHTTPServer2.2
  - InterstageOperationTool(FJapache)
  - Naming
  - ObjectTransactionService
  - odloader
  - TransactionDirector
  
- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Eventlog¥Application配下の以下のキー
  - AHS
  - F3FMes
  - F3FMextp
  - F3FMihs
  - F3FMijmq ISJE6
  - F3FMijmq ISJE7
  - F3FMirep
  - F3FMis
  - F3FMisje6
  - F3FMisje6Manage
  - F3FMisje7
  - F3FMisje7Manage
  - F3FMisjmx
  - F3FMjms
  - F3FMjs2su
  - F3FMjssrc
  - F3FMjssrs
  - F3FMod
  - F3FMots
  - F3FMpcmi
  - F3FMpcmiisje7
  - F3FMpcmiManage
  - F3FMsso
  - F3FMsvmon
  - F3FMtd
  - F3FMwsc
  - IJServer
  - INTERSTAGE EJB
  - ISPerf
  - MessageQueueDirector

以下のレジストリキーは富士通製Javaが搭載された他製品がインストールされている場合に共通のレジストリキーとなります。富士通製Javaが搭載された他製品をアンインストール後、以下のレジストリキーが存在する場合だけ、削除してください。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Java配下の以下のキー
  - 0260
  - 0261
  - STD

### 注意

上記のキーを削除した結果、「HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Java」配下にキーが存在しない場合は、以下も削除してください。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu配下の以下のキー
  - Java

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥J Business Kit¥3.0¥Install配下の以下のキー
  - 1200

### 注意

上記のキーを削除した結果、「HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥J Business Kit¥3.0¥Install」配下にキーが存在しない場合は、以下も削除してください。

- HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu配下の以下のキー
  - J Business Kit

## 3. アイコン/グループを削除する

デスクトップの以下のアイコンを削除します。

- Interstage Studio V12.0

スタートメニューのアイコン/グループを削除します。  
以下のファイルを削除してください。

- Windowsのインストールドライブ名:¥ProgramData¥Microsoft¥Windows¥Start Menu¥Programs配下の[Interstage Studio V12.0]
- Windowsのインストールドライブ名:¥ProgramData¥Microsoft¥Windows¥Start Menu¥Programs¥FJQSS (資料採取ツール) 配下の[資料採取 (Interstage Studio V12.0)]

## 4. 環境変数を削除する

本製品で定義する環境変数を削除します。

以下の各機能が搭載された他製品がインストールされている場合には共通の環境変数となりますので、以下の各機能が搭載された他製品をアンインストール後、以下の環境変数が存在する場合だけ削除してください。

- アプリケーションサーバ機能が搭載された他製品と共通の環境変数
  - EXTPATH
  - IS\_HOME
  - IS\_J2EEAPF
  - OD\_HOME
  - TD\_HOME
- 富士通製Javaが搭載された他製品と共通の環境変数
  - JAVA\_HOME



## 参考

環境変数の編集および削除は以下のように行います。

- [コントロールパネル]の[システムとセキュリティ]を選択します。次に[システム]を選択し、[設定の変更]をクリックします。[詳細設定]タブから[環境変数]をクリックします。[システム環境変数]内から該当する環境変数名を選択し、[編集]/[削除]をクリックします。

### 5. 環境変数PATHを削除する

環境変数PATHに、以下のフォルダパスがある場合はそれらを削除します。

なお、特定の機能が搭載された他製品、または富士通製Javaが搭載された他製品がインストールされている場合には、それらの製品をアンインストール後、下記環境変数PATHが存在する場合だけ削除してください。

- C:¥Interstage¥APS
- C:¥Interstage¥IDE

### 6. 環境変数CLASSPATHを削除する

環境変数CLASSPATHに、以下のフォルダパスがある場合はそれらを削除します。

なお、特定の機能が搭載された他製品、または富士通製Javaが搭載された他製品がインストールされている場合には、それらの製品をアンインストール後、下記環境変数CLASSPATHが存在する場合だけ削除してください。

- C:¥Interstage¥APS
- C:¥Interstage¥IDE

また、環境変数CLASSPATHに"."が残ることがあります。必要に応じて削除してください。

### 7. フォルダを削除する

C:¥Program Files¥InstallShield Installation Information配下の次のフォルダを削除します(Cドライブがシステムドライブの場合)。

- {0AA137CF-790C-4CB3-B520-D191548A79A2}

必要に応じ、Java統合開発環境および運用テスト環境の各環境上の資源(資産)の退避を行ってから、インストール時に指定したフォルダ(例:C:¥Interstage)配下に作成される以下のフォルダを削除します。

- IDE¥1200
- IDE¥1200\_WB46
- IDE¥JBK
- IDE¥jbkplgdi
- IDE¥JDK8
- IDE¥JDK7

以下のフォルダはアプリケーションサーバ機能が搭載された他製品がインストールされている場合に共通のフォルダとなる場合があります。アプリケーションサーバ機能が搭載された他製品をアンインストール後、以下のフォルダが存在する場合だけ削除してください。

- C:¥Interstage¥APS
- C:¥Program Files¥Common Files¥Fujitsu Shared¥F3FSSMEE
- C:¥Program Files¥F3FSSMEE
- C:¥Program Files¥SecurecryptoLibraryR

利用者の資産が格納されるフォルダについては、"[3.1 アンインストール前の作業](#)"を参照してください。

また、"[フォルダの削除](#)"を参照して、不要なフォルダが残っている場合は削除してください。

## 8. ファイルを削除する

C:\Program Files\Fujitsu\FJQSS\product配下の次のファイルを削除します(Cドライブがシステムドライブの場合)。

- cnf\_INTS-STDSJE1\_V12.0.0.txt

以下のファイルはアプリケーションサーバ機能が搭載された他製品がインストールされている場合に共通のファイルとなる場合があります。アプリケーションサーバ機能が搭載された他製品をアンインストール後、以下のファイルが存在する場合だけ削除してください。

- C:\Windows\System32配下のF3FSSMEEの資材削除
  - f3eztdat.dll
  - F3FGssl4.dll
  - F3FGssl6.dll
  - F3FPSASN.dll
  - F3FPSP07.dll
  - F3FPSP11.dll
  - F3FSBCER.DLL
  - F3FSBCMN.DLL
  - F3FSBKEY.DLL
  - F3FSCRTM.DLL
  - F3FSCRTM2.dll
  - F3FSCRTM3.dll
  - f3fsscmi.dll
  - f3fssmime.dll
  - F3FSTP12.dll
  - F5eubcer.dll
  - F5EUBCEX.dll
  - F5EUbcmn.dll
  - F5eubkey.dll
  - F5EUJSCM.dll
  - F5EUscmi.dll
  - F5EUsmime.dll
  - F5EUsp07.dll
  - F5EUsp11.dll
  - F5EUssl4.dll
  - F5EUssl6.dll
  - F5eutp12.dll
- C:\Windows\System32配下のSecurecrypto Library Rの資材削除
  - F3EZsclcmd.dll
  - F3EZcmn.dll
  - F3EZdat.dll
  - F3EZeex.dll
  - F3EZmain.dll
  - F3EZscl.dll
  - F3EZscl2.dll
- C:\Windows配下のEventServiceの資材削除
  - esnotifywin.dll
  - ESNOTIFYWINCBL.DLL
  - ESNOTIFYWINCBLMT.DLL
  - ESNOTIFYWINCBLUC.DLL
  - esnotifywincpp.dll
  - esnotifywinsv.dll
  - ESNOTIFYWINSVCBL.DLL
  - ESNOTIFYWINSVCBLMT.DLL
  - ESNOTIFYWINSVCBLUC.DLL
  - esnotifywincpp.dll
  - eswin.dll
  - eswincl.dll
  - ESWINCBLMT.DLL

eswincbluc.DLL  
eswincpp.dll  
eswinsv.dll  
eswinsvubl.dll  
ESWINSVCBLMT.DLL  
eswinsvubluc.DLL  
eswinsvcpp.dll

• C:\Windows配下のObjectDirector Serverの資材削除

f3fmdgst.dll  
f3fmdgst\_sv.dll  
f3fmic23.dll  
f3fmic25.dll  
f3fmic27.dll  
F3FMIC35.DLL  
F3FMIC77.DLL  
f3fmicis.dll  
libomircubl.dll  
LIBOMIRCBLMT.DLL  
LIBOMIRCBLMTSV.DLL  
libomircblsv.dll  
LIBOMIRCBLSVUC.DLL  
LIBOMIRCBLUC.DLL  
LIBOMIROOCOB.dll  
LIBOMIROOCOBSV.dll  
LIBOMIROOCOBSVUC.dll  
LIBOMIROOCOBUC.dll  
ODAdmin.dll  
odautosetup.dll  
Odcn.dll  
Odcncpp.dll  
ODCNOOCOB.DLL  
ODCNOOCOBUC.DLL  
Odcnscpp.dll  
ODCNSOOCOB.DLL  
ODCNSOOCOBUC.DLL  
Odcnsv.dll  
ODCOBCBL.DLL  
ODCOBCBLMT.DLL  
ODCOBCBLMTSV.DLL  
ODCOBCBLSV.DLL  
ODCOBCBLSVUC.DLL  
ODCOBCBLUC.DLL  
ODEVTLOG.DLL  
ODIF.DLL  
Odif\_e.dll  
Odif\_r.dll  
ODIFSV.DLL  
Odifsv\_e.dll  
Odifsv\_r.dll  
ODIRLOG.DLL  
ODiruty.dll  
ODjava4.dll  
ODjava4\_g.dll  
ODjvas4.dll  
ODjvas4\_g.dll  
Odjvasv4.dll  
Odjvasv4\_g.dll

odlbo.dll  
odlbosv.dll  
ODLBSCBL.DLL  
ODLBSCBLMT.DLL  
odlbscpp.dll  
ODLBSOOCOB.dll  
ODmisc.dll  
ODOBF.DLL  
ODOLE.INI  
ODoocob.DLL  
ODoocobsv.dll  
ODOCOBSVUC.DLL  
ODOCOBUC.DLL  
ODsocket.dll  
ODsocket\_ipv6.dll  
ODsocketsv.dll  
ODsocketsv\_ipv6.dll  
Odsv.dll  
ODSVCPP.DLL  
Odsvcpppoa.dll  
odtsck.dll  
ODuty.dll  
odwin.dll  
ODWIN.INI  
ODWINCPP.DLL

- C:\Windows\System32配下のObjectDirector Serverの資料削除  
InterfaceRep\_Cache\_s.exe  
InterfaceRep\_e.exe  
Naming.exe  
nslbo\_service.exe  
ODEVTMSG.DLL  
ODLOADER.EXE  
Odstart.exe
- C:\Windows\System32配下のInterstage Single Sign-onの資料削除  
F3FMssobase.dll  
F3FMssojdec.dll  
F3FMssoutils.dll  
F3FMssoutrace.dll
- C:\Windows配下のF3FMjs2suの資料削除  
F3FMjs2suadmap.dll  
F3FMjs2suadmtool.dll  
F3FMjs2sucom.dll  
F3FMjs2suisap.dll
- C:\Windows\System32配下のFJSVj2eeの資料削除  
F3FMijsvls.dll  
F3FMj2ee.dll

## 9. Tempフォルダ配下のファイルを削除する

環境変数TMPまたは環境変数TEMPで指定されているフォルダ配下の以下のファイルを削除してください。

- f5drinst\_1200.log

## 10. [アンインストールと管理(ミドルウェア)]の管理DBからソフトウェア情報を削除する

スタートメニューの[すべてのプログラム]>[Fujitsu]>[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動した時、アンインストールした製品情報が表示される場合は、管理DBから製品情報を削除する必要があります。  
以下のコマンドを実行して、製品情報を削除してください。

```
"C:¥Program Files¥Fujitsu¥FujitsuF4CR¥cir¥bin¥ciope.exe" metadb-remove-entry -i EA2DECDA012B10000000A7CCBB1449 -v 1200 -f
```

## 11. コンピュータを再起動する

コンピュータの再起動をします。

# 索引

---

[F]	
FJQSS(資料採取ツール).....	1
[I]	
Interstage基盤サービス操作ツール.....	40
[J]	
Java統合開発環境.....	1
[あ]	
アプリケーションサーバのサービス.....	40
アンインストール.....	44
アンインストールと管理(ミドルウェア).....	1,12
インストール.....	5
インストールタイプ.....	2
運用テスト環境.....	1
[か]	
環境変数.....	6,10,11,33,41
機能の追加と削除.....	2
コンポーネント一覧.....	2
[た]	
他製品との関係について.....	2
注意事項.....	8,45
[ら]	
リモートデスクトップサービス.....	8,40,44,50